平成三十年度

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成三十一年三月

一般社団法人　高山市文化協会

序

一般社団法人　高山市文化協会は、高山市から委託を受けて、郷土に係わりのある文学作品を収集・調査して、作者の功績とともに「高山市近代文学館調査・研究報告書」にまとめ、市民の皆様に紹介しています。

今回の報告書では、今年度開催した近代文学館企画展の展示内容をまとめました。十月の第二十九回企画展では、「歌に見る高山の風景」と題し、かつて各地で活躍した文学者が、飛騨の様々な人々の生活や自然の風景から、心に留まった情景を詠んだ文学作品を調査し紹介しました。

三月の第三十回企画展では、終戦後暫らくは日々の生活にも困窮する時代にあって、人々の心に潤いと豊かさを求め、そして郷土の文化を高めようと、大埜間霽江を中心に「飛騨短歌会」が結成され、その思想が今日まで続いています。その「飛騨短歌会」の創設者の作品を中心に、「大埜間霽江の時代」と題して紹介しました。

当協会は、主に近代に活躍した郷土の文学者の作品などを紹介することにより、多くの市民の皆様に文学に関心を寄せていただき、さらに高山市の文化の向上のために、これからも調査と発表に努めてまいります。

平成三十一年三月

一般社団法人　高山市文化協会

目次

第二十九回近代文学館企画展「歌に見る高山の風景」……1
一、赤田　章斎……2
二、田中　大秀……3
三、富田　礼彦……8
四、佐々木　信綱……10
五、河東　碧梧桐……11
六、大谷　光演（句仏）……13
七、牧野　英一……14
八、若山　牧水……16
九、野口　雨情……18
十、牧野　良三……19
十一、福田　夕咲……21
十二、松村　蒼石……23
十三、瀧井　孝作……24
十四、高碕　達之助、藤井　崇治……27
十五、鎌手　白映……29
十六、大埜間　霽江……30
十七、大野　林火……31
十八、日野大納言（弘資）……32
十九、飛鳥井大納言（雅章）……33
二十、寒厳　和尚……34
二十一、赤田　臥牛……35
二十二、岩佐　一亭、吉村　豊足……36
二十三、蒲　八十村……37
二十四、森野　梢隆……38
二十五、小峯　大羽……39
二十六、井上　靖……40
二十七、和仁　市太郎……41
二十八、桐山　玄豹……42
二十九、丸山　晩霞……43
三十、松崎　鉄之介……44
三十一、中村　草田男……45
三十二、後藤　重郷……46
三十三、杉下　太郎右衛門（豊）……47
三十四、都築　霊源……48
三十五、富田　道彦……49
三十六、富田　豊彦……50
三十七、前田　光次郎（万岳）……56

第三十回近代文学館企画展「大埜間霽江の時代」……57
一、大埜間　霽江……58
二、大埜間　岩之助（楽杏）……71
三、福田　夕咲……72
四、富田　令禾……77
五、鎌手　白映……81
六、都竹　豊治……84
七、山田　白馬……85
八、谷口　桃里……88
九、森　渓月（荒川　喜一）……89
十、江黒　美胤……93
十一、浅本　義一郎……95
十二、飛騨短歌……96

第二十九回　近代文学館企画展
「歌に見る高山の風景」

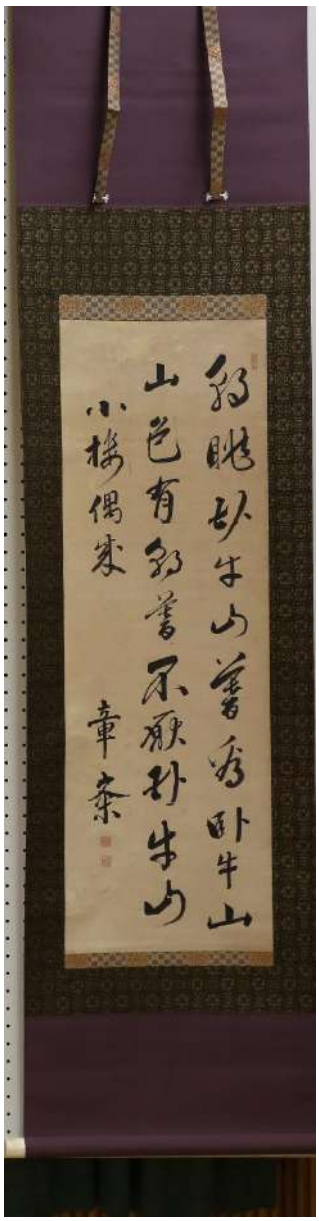
平成三十年十月二十日（土）～二十一日（日）　於　高山市図書館「煥章館」

一、赤田（あかだ） 章斎（しょうさい）

天明四年（一七八四）～弘化二年（一八四五）九月二十九日

儒学者。赤田臥牛の嫡子。名は光暢。字は永和。通称を新助。幼名は貞吉。鉅埜逸民・公茂と号する。臥牛の教えを受け、文政元年（一八一八）から父に代わって静修館の教授。天保三年（一八三二）十一月の大火で静修館が焼失したため高山馬場通り海老坂上に再興し、飛騨国中教授所として郷村を巡回教授。弘化元年（一八四四）九月には神明町角に移築。詩文、絵画にも優れ敬神の念が篤かった。花里天満宮に本人の識した退筆塚がある。

【飛騨人物事典】



［小楼偶来］

朝眺臥牛山　暮看臥牛山
山色有朝暮　不厭臥牛山
小楼偶来　　章斎

二、田中（たなか） 大秀（おおひで）

安永六年（一七七七）八月十五日～弘化四年（一八四七）九月十六日

国学者。高山一之町の薬種商の家に生まれる。通称は弥兵衛・平之丞。号を紀文。後に大秀と改める。別に八月満・湯津香木園、晩年は荏野翁・荏野老人・三酉。

自庭を千種園と呼ぶ。幼より読書詠歌を好み粟田知周、伴　蒿蹊らに学ぶ。享和一年（一八〇一）本居宣長の門に入り、没後は本居大平を訪ね国典を研究。飛騨に初めて国学を伝え、多くの門人を擁した。敬神勤皇の念篤く、文政一年に荏名神社、同四年に飛騨総社を再興。歌学、管弦も教授。大正四年御即位の大典に当たり正五位。著書に『竹取翁物語解』『養老美泉弁』『荏野冊子』『土佐日記解』他

【飛騨人物事典抜粋】

［待郭公］

老ぬれば　こころいらちて　子規（ホトトギス）
おほののなさけ　いとどまさわる

［春　山口］

分ゆかむ　おくをいくへの　白雲も
にほひそめたる　花の山口　大秀

［春　久々濃山］

くくの山　木立もしげく　立こめて
檜原かすめる　春のあけぼの　大秀

［夏　本母里］

かやりたく　煙いふせき　夕暮は
月もほのふの　里とこそみれ　大秀

［夏　水無神社］

宮殿の　御前すゝしも　水無川
みそぎに罪や　みな月の空　大秀

［秋　錦山］

秋の色　をそむる時雨の　たてぬきも
よそにことなる　錦山かな　　大秀

［秋　那陀］

秋風に　穂波をわたる　鳥が音の
かりしほみ見ゆる　灘のおきつ田　大秀

［冬　細江］

風さむみ　細江のみぎわ　氷るらし
ねぬ夜ふけゆく　菅鳥のこえ　大秀

［冬　位山］

くらゐ山　坂路もやすく　昇りけむ
雪のひかりの　あきらけき世に　大秀

三、富田（とみた）　礼彦（いやひこ）

文化八年（一八一一）二月二九日～明治十年（一八七七）五月三日

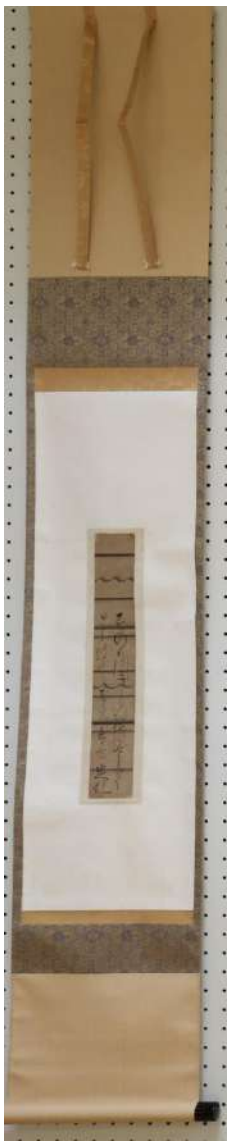
高山の地役人・高山県判事・国学者。号を和郷・節斎・白檮園・南東与可楼。通称を稲太。小野郡代に薦めて飛騨各地に非常食糧を蓄えさせ、安政大地震で効果を見せる。田中大秀に国学を、赤田章斎に漢学を学ぶ。高山陣屋玄関の「天朝御用所」の高札は礼彦の筆。

『斐太後風土記』編纂主任。著書に『運材図絵』『三郡沿革』など多数。

【高山市史・飛騨人物事典抜粋】

［社頭霞］

さくら山　神の宮居も　霞むなり
梢の花や　慕いそぐらむ　礼彦



すのり川　岸の桜の　影みへて
さゞ波かほる　灘の春風

［豊臣公の昇進のゑに］

人は皆　ふもとにきつゝ　位やま
みねのましらを　仰ぎてぞ見る　礼彦

※ましら＝猿…秀吉のこと

四、佐々木（ささき） 信綱（のぶつな）

明治五年（一八七二）七月八日～昭和三十八年（一九六三）十二月二日

歌人、国文学者。三重県鈴鹿郡石薬師村（現鈴鹿市石薬師町）佐々木弘綱の長男として生まれる。父の教えを受けて五歳にして作歌。明治十七年（一八八四）東京大学文学部古典講習科入学。明治二十三年（一八九〇）父と共編で『日本歌学全集』全十二冊の刊行開始。明治二十九年（一八九六）森鴎外の「めざまし草」に歌を発表し、歌誌「いささ川」を創刊。また落合直文、与謝野鉄幹らと新詩会をおこし、新体詩集『この花』を刊行。短歌結社竹柏会を主宰し、木下利玄、川田順、他多くの歌人を育成。国語学者の新村出、翻訳家の片山広子、国文学者の久松潜一も和歌を学んだ。昭和十二年（一九三七）文化勲章を受章、帝国芸術院会員。御歌所寄人として歌会始撰者でもある。

【ウィキペディア】

［御母衣ダムの碑］

すゝみゆく
御代のしるしと
うもれても
荘白川の
名をとこしへに

昭和三十六年建立　荘川桜下

五、河東（かわひがし）　碧梧桐（へきごとう）

明治六年（一八七三）二月二十六日～昭和十二年（一九三七）十二月一日

俳人。松山市生まれ。名は秉五郎。

正岡子規に師事し俳句革新運動に加わる。明治三十六年（一九〇三）ごろから新傾向俳句へ進む。旧習打破、真実探求、個性拡充の時代の風潮に刺激され全国を風靡する。四十二年（一九〇九）七月、続三千里の旅の途中、信州松本から高山へ来て若き日の瀧井孝作と出会い、孝作は歓迎句会で認められる。四十五年（一九一二）にも再訪し高山の俳句界に影響を与える。

四十四年（一九一一）俳誌『海紅』を創刊。著書『碧梧桐俳句集』『新俳句』。

【飛騨人物事典】

［御母衣にて］

蚕守る
灯も見えなくる
榾の火もささず　碧

［白川］

大家族の　遺す家ウリの
木の茂り　碧

六、大谷（おおたに） 光演（こうえん）（句仏（くぶつ））

明治八年（一八七五）二月二十七日～昭和十八年（一九四三）二月六日

浄土真宗の僧・俳人。東本願寺二十三世。京都生。二十二世光瑩（現如上人）の次男。諱は光演、法名は釈彰如、句仏は俳号。幼年から諸流の書道を学び、杉山三郊に師事する。絵画は幸野楳嶺・竹内栖鳳について一家を成し、俳句は河東碧梧桐につく。著書も多い。

【美術人名辞典】

乗鞍晴れを
紅葉もて遠忌
飾るかな

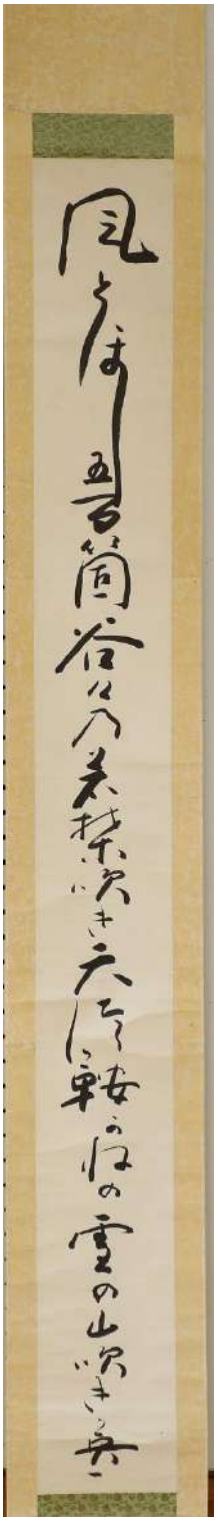
七、牧野（まきの）　英一（えいいち）

明治十一年（一八七八）三月二十日～昭和四十五年（一九七〇）四月十八日

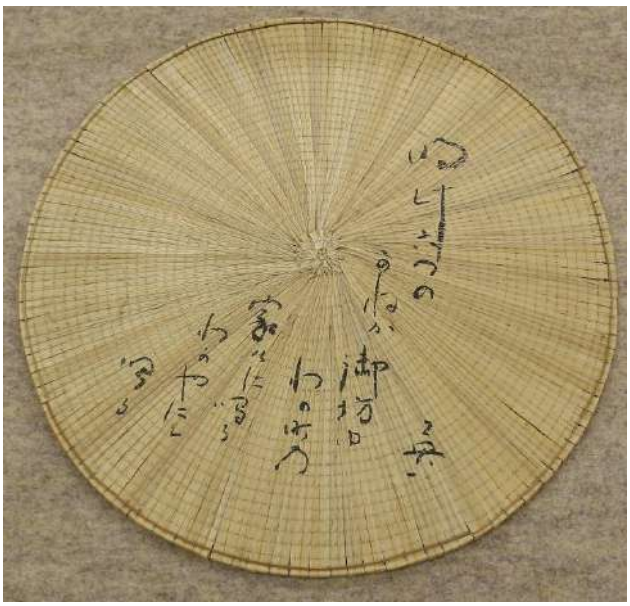
刑法学者・高山市名誉市民。高山町上向町出身で神奈川県茅ケ崎市に居住。良三の兄。斐太中学、東京帝国大学法学部卒。法学博士。東京地裁判事などを経て明治四十（一九〇七）年東大助教授、大正二年（一九一三）教授。この間明治四十三年（一九一〇）からヨーロッパに留学し、近代派刑法学の論理を学んだ。「刑は教育のためである」という教育刑主義で大きな影響を与えた。昭和二十一年（一九四六）貴族院議員となり新憲法の制定に携わった。公職適格審査委員長として公職追放の実施に当たった。佐々木信綱門下の歌人でも評価が高かった。

著書『日本刑法』『刑法研究』ほか。文化勲章（昭二五（一九五〇））。初の高山市名誉市民（昭三三（一九五八））。勲一等瑞宝章（昭四〇（一九六五））。従二位（昭四五（一九七〇））。

【飛騨人物事典】



風とほし　五百箇（いほち）谷々乃　若葉吹き　天津鞍可ねの　雪の山吹き　英一



明け六つの　かねが御坊ゆ　わが町の
家々に鳴る　わが家にも鳴る　英一

八、若山　牧水（わかやま　ぼくすい）

明治十八年（一八八五）八月二十四日～昭和三年（一九二八）九月十七日

歌人。本名繁。宮崎県東臼杵郡東郷村（現日向市）の医師の長男として生まれる。明治三十二年（一八九九）宮崎県立延岡中学校に入学。短歌と俳句を始める。十八歳のとき、号を牧水とする。明治四十一年（一九〇八）早稲田大学英文科卒、七月に処女歌集『海の声』出版。明治四十四年（一九一一）創作社を興して詩歌雑誌「創作」を主宰する。大正十五年（一九二六）詩歌総合雑誌「詩歌時代」を創刊。旅を愛し、旅にあって各所で歌を詠み、日本各地に歌碑がある。大の酒好きで、一日一升の酒を呑んでいたといわれる。

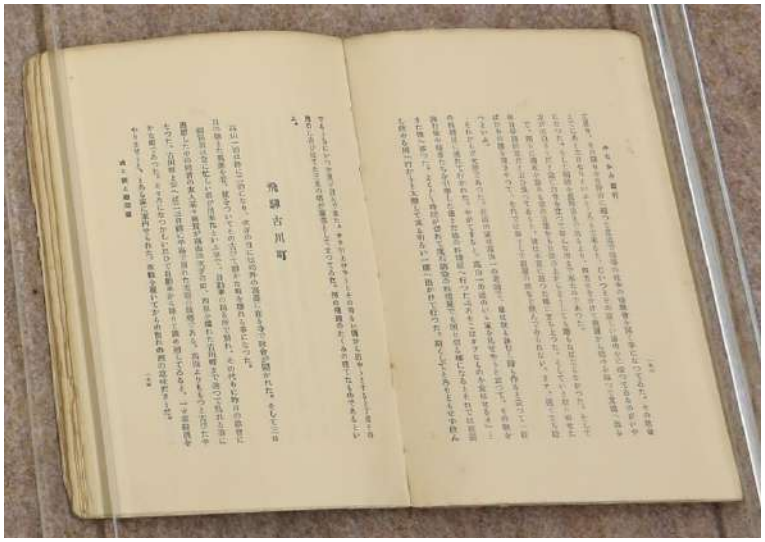
【ウィキペディア】

山々の　なかの静けき　みやこには
しかるべきよき　新聞出でよ　若山牧水

［若山牧水　歌碑］　昭和三十八年建立　平湯峠頂上

のぼり来て　平湯峠ゆ　見はるかす
ひだの平に　雲こゞりたり　牧水

『みなかみ紀行』



九、野口（のぐち）　雨情（うじょう）

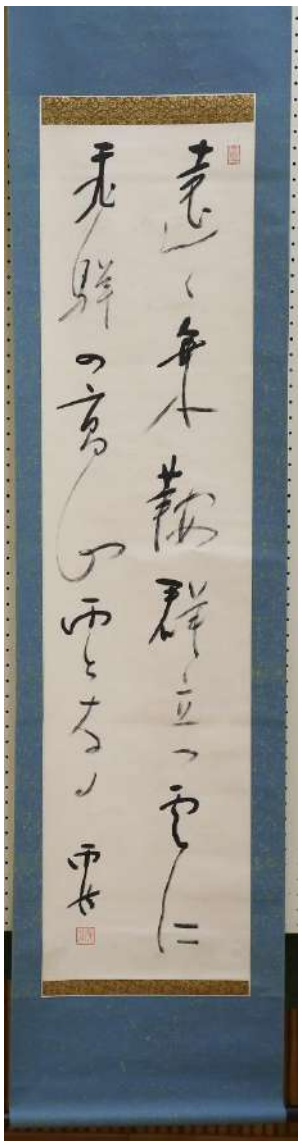
明治十五年（一八八二）五月二十九日～昭和二十年（一九四五）一月二十七日

近代の民謡、童謡詩人。本名英吉。茨城県生まれ。

東京専門学校（早大）中退後、明治三十八年（一九〇五）に創作民謡集『枯草』を刊行。以後、北海道・茨城・東京と移りつつ詩作を続ける。大正八年（一九一九）童謡運動をはじめ、翌年には児童雑誌『金の船』（のち『金の星』）に毎月発表しはじめる。十年には童謡集『十五夜お月さん』を刊行。その後も民謡や童謡の創作、理論的指導などを精力的に行った。「船頭小唄」が演歌師三年（一九二八）には「波浮の港」、翌年には「紅屋の娘」のレコードがヒットするなど、新しいメディアにのって大衆に親しまれる歌を生んだ。「七つの子」「シャボン玉」「青い眼の人形」などのように、いわゆる純真な童心をうたいあげた作品を作り、典型的な童謡イメージを確立したこともみのがせない。

著作『定本野口雨情』全八巻。

【ウィキペディア】



遠く乗鞍　群立つ雲に
飛騨の高山　雨となる

［高山歌謡］

高山歌謡　作　野口雨情

一節　忘れなさるな　高山は城下
　飛騨の匠が　出た処
二節　遠く乗鞍　群立つ雲に
　飛騨の高山　雨となる
三節　春の城山　桜の垣は
　一夜明ければ　花となる
四節　川は宮川　飛騨高山は
　水の流れも　寝てて聞く
五節　飛騨の高山　なつかしところ
　昔ながらの　城下町

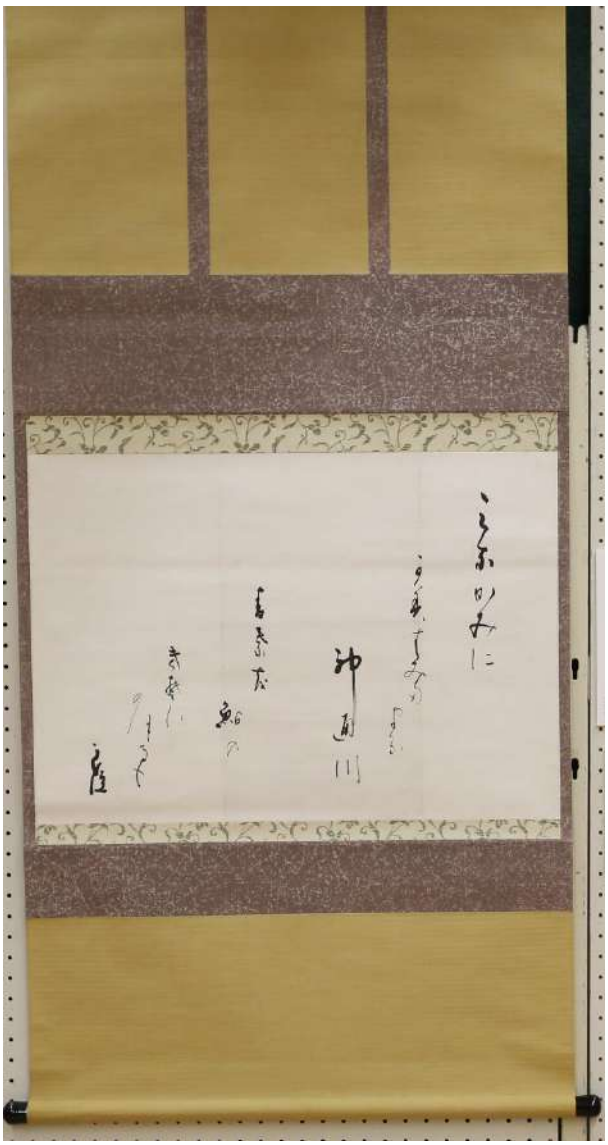
十、牧野（まきの） 良三（りょうぞう）

明治十八年（一八八五）五月二十六日～昭和三十六年（一九六一）六月一日

法務大臣。高山町上向町の生まれで東京都千代田区に居住。号は飛州。英一の弟。斐太中学、東京帝国大学法科大学卒。法学博士。逓信省勤務や弁護士を経て、大正九年衆議院議員となり通算十回当選。昭和三十年、鳩山内閣で飛騨初の大臣（法務大臣）に就任。政治感覚の確かさと雄弁家で知られ、国会で「軍部は政治を考えても批判してもならぬ」などと、軍部の政治干渉に真っ向から挑んだ。歌舞伎、新国劇等を好み、赤坂の芸妓と芸の本筋を語り合うという一面も持っていた。

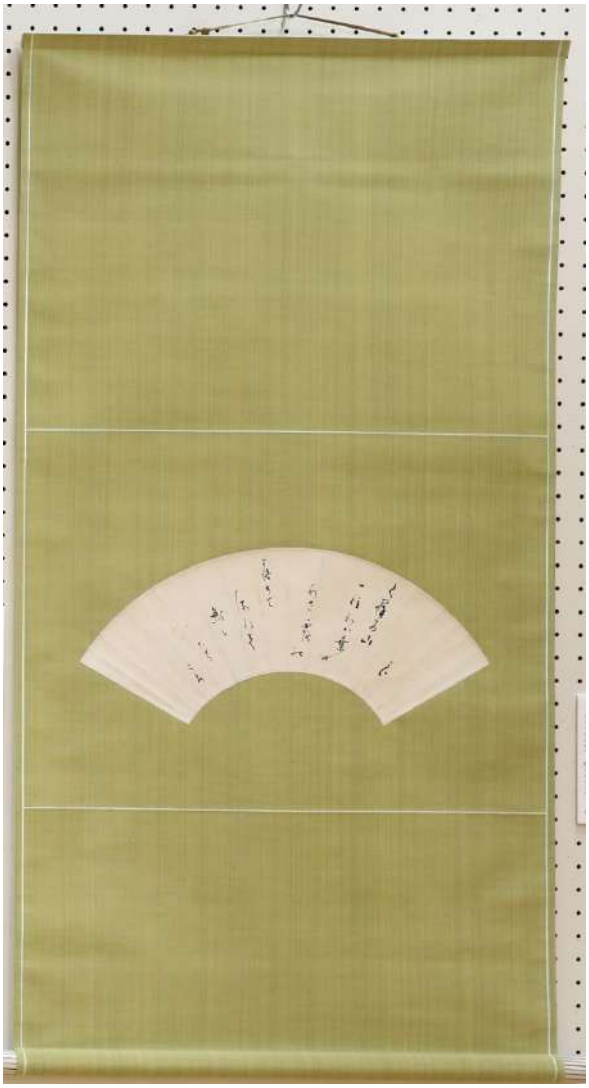
高山市名誉市民（昭三六）、正三位勲一等旭日大綬章（昭三六）。

【高山市史】



みなかみに　かすみたまふ　神通川
青葉も鮎の　きそひのぼるも　良三

飛騨の山　しなののやまも　越のやまも
よひかはし居り　霧のおほ海　良三



く羅ゐ山　一位わか葉の　あさ露の
落ちてながれて　鮎となるころ　良

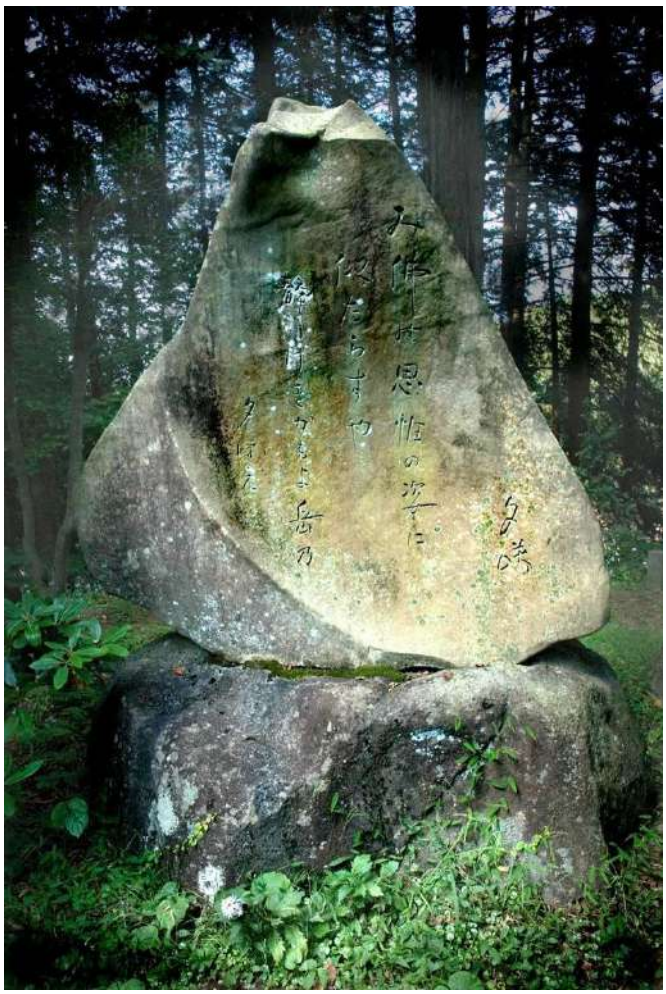
十一、福田（ふくだ） 夕咲（ゆうさく）

明治十九年（一八八六）三月十二日～昭和二十三年（一九四八）四月二十六日

詩人・歌人。高山市大新町一の人。吉郎兵衛（敦雄）の四男。本名は有作。斐太中学、早稲田大学文学部卒。学生時代から人見東明、相馬御風らと交わって「自由詩社」を創設。明治四十二年（一九〇九）読売新聞社に入社して北原白秋、若山牧水らと詩壇の新運動に参加。家庭の事情で大正三年（一九一四）帰郷。瀧井孝作らとの『ツチグモ』の創刊、（大三（一九一四））『飛騨新聞』創刊（昭二二（一九四七））を始め山百合詩社、飛騨山刀倶楽部、飛騨短歌会などを育てて飛騨の文化に大きな足跡を残した。その才能から、飛騨という田舎にこもるのを惜しむ声もあった。昭和十七年（一九四二）高山食品卸市場が設立され常務取締役。

詩集『春の夢』、歌集『山花一束』『山づと』。

【飛騨人物事典】

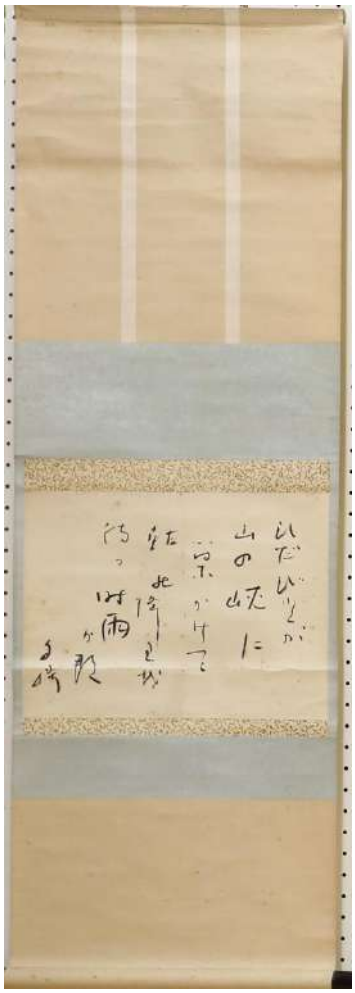


（夕咲　碑）　昭和二十三年建立　城山月見平

み佛の　思惟の姿に　似たらすや
静けきかもよ　岳の夕はえ　夕咲

（福田夕咲　歌碑）昭和二十九年建立
平成二十三年移設　文学散歩道

いわのなる　沼の水乃面に　白くもの
うつろうみれば　そぞろさびしき　夕咲



ひだびとが　山の峡に　築かけて
鮎の降りを　待つ時雨かな　夕咲

十二、松村（まつむら）　蒼石（そうせき）

明治二十年（一八八七）十月二日～昭和五十七年（一九八二）一月八日

滋賀県出身の俳人。本名は増次郎。

滋賀県蒲生郡清水鼻（現東近江市）生。十三歳で京都の織物問屋へ奉公に出る。十七歳の頃より新聞の俳句欄に投句。明治三十九年（一九〇六）より東京の支店に勤務し作句を中断したが、関東大震災に被災した後再開。「鹿火屋」「枯野」に投句ののち、大正十四年（一九二五）に「雲母」に入会、飯田蛇笏、龍太に師事する。戦後は「玉虫」を発行。「雲母」にて昭和四十一年（一九六六）および昭和四十八年（一九七三）に山廬賞を受賞。同年、句集『雪』その他の業績により第七回蛇笏賞を受賞。代表句に「たわたわと薄氷に乗る鴨の脚」など。句集に『寒鶯集』（昭二五（一九五〇））、『露』（昭三五（一九六〇））、『春霞』（昭四二（一九六七））、『雪』（昭四七（一九七二））、『雁』（昭五〇（一九七五））がある。

【ウィキペディア】

蓴菜泛く秋さむき池美女峠　蒼石

十三、瀧井（たきい）　孝作（こうさく）

明治二十七年（一八九四）四月四日～昭和五十九年（一九八四）十一月二十一日

小説家・文化功労者。高山町空町（現大門町）生まれで東京都八王子市に居住。号は折柴。

河東碧梧桐に師事し俳句の道に入った。大正八年（一九一九）時事新報記者になり、このころから芥川竜之介、志賀直哉らの知遇を得て文筆活動が旺盛となり『飛騨高山』などの短篇小説や随筆を次々に発表。昭和二年（一九二七）代表作『無限抱擁』発表。『野趣』で読売文学賞（昭和四十三（一九六八））。『俳人仲間』で日本文学大賞（昭四九（一九七四））。作品は「瀧井文学」と評され、トツトツとした中にも独特の味わいを持つ。昭和十年（一九三五）の芥川賞創設から五十六年（一九八一）まで選考委員を務めた。俳句を生涯の友とし『瀧井孝作全句集』などがある。高山の観光ポスターに用いる「飛騨高山」の文字など六朝風の書法でも知られる。

日本芸術院会員（昭和三十四（一九五九））。高山市名誉市民（昭四六（一九七一））。文化功労者（昭四九（一九七四））。勲二等瑞宝章（昭五〇（一九七五））。八王子市名誉市民（昭五〇（一九七五））。

【飛騨人物事典】

（瀧井孝作　句碑）平成十一年建立　飛騨国分寺

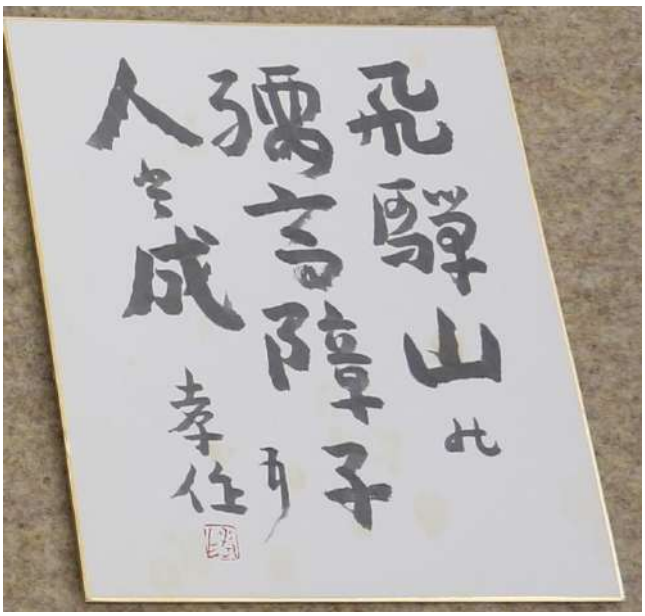
大銀杏　鳥のこもりね　若葉哉

乗鞍に　雪光る日や　蕪引　孝作

（瀧井孝作　句碑）若達町宝橋詰

短夜の　鐘のねいろに　目覚めけり　孝作

飛騨山の　腰高障子　人と成　　孝作



十四、高碕（たかさき） 達之助（たつのすけ）

明治十八年（一八八五）二月七日～昭和三十九年（一九六四）二月二十四日

政治家、実業家。電源開発初代総裁、通産大臣、初代経済企画庁長官等。

大阪高槻市生まれ、旧制茨木中学卒、農商務省水産講習所（現東京海洋大学）に入所、水産技師として活躍。昭和十三年東洋製罐専修学校（後の東洋食品工業短期大学）を設立。昭和十七年、満州重工業開発総裁に。昭和二十七年、電源開発総裁に就任。佐久間ダム建設など大事業を成功、御母衣ダム建設では、世界植樹史上に残る「荘川桜」移植事業を発案、推進した事でも名高い。

高槻市の百姓兼紺屋の七人兄弟の三番目で、子どもの頃四条村野崎（現大東市野崎）の酒屋に預けられた。

【ウィキペディア】

（荘川桜の碑）　昭和三十五年建立　荘川桜下

高碕達之助作

ふるさとは　水底となりぬ　うつし来し

この老桜　咲けとこしへに

藤井崇治書

藤井（ふじい） 崇治（そうじ）

明治二十七年（一八九四）七月一日～昭和五十年（一九七五）三月十八日

逓信官僚、電源開発総裁。広島県深安郡山野村（現福山市山野町）出身。広島県立福山中学（現福山誠之館高校）、旧制第三高等学校、京都帝国大学法学部法律科卒。

逓信省入省。郵便戸番制の採用など独創的な方策を樹立。昭和二十九年（一九五四）電源開発副総裁として、御母衣ダム建設での補償交渉などにあたり、反対派住民の態度を軟化させた『幸福の覚書』の逸話が残る。昭和三十三年（一九五八）電源開発総裁に就任。この御母衣ダム建設工工事で移植した、かの有名な巨桜を昭和三十七年（一九六二）六月に行なわれた水没記念碑除幕式で「荘川桜」と命名した。

昭和三十七年（一九六二）藍綬褒章、昭和四十年（一九六五）、勲二等旭日重光章受章。

【ウィキペディア】

十五、鎌手（かまて）　白映（はくえい）

明治二十八年（一八九五）五月一日～昭和五十三年（一九七八）二月二日

歌人。高山市下一之町の人。本名は隆三。斐太中学卒。

家業の洋品雑貨店を営んだ。大正二年（一九一三）の「飛騨短歌会」創設メンバー。五年（一九一六）白映が主宰し歌誌『裸形』を発刊。七年（一九一八）には福田夕咲、山田白馬らと「山百合詩社」を発足。昭和四年（一九二九）に『悲陀』、五年（一九三〇）には第二次『裸形』を発刊。また戦後の二十一年（一九四六）に『飛騨短歌』を出し、平成九年（一九九七）の廃刊まで続いた。野口雨情、若山牧水と交友があった。飛騨短歌史に重要な役割を果たし、中心的な指導者。絵や篆刻にも優れ古渓と号した。

歌集『夕映』『鎌手白映遺歌集』。

【飛騨人物事典】

（鎌手白映歌碑）昭和五十三年建立　上野町公民館

のりくらは　天のた可山　夕焼て
ただれて燃えて　空に消えたり　白映

十六、大埜間（おおのま） 霽江（せいこう）

明治三十二年（一八九九）四月五日～昭和五十七年（一九八二）六月二十九日

内科医・歌人。丹生川村（現高山市）法力出身で高山市馬場町二に居住。岩之助の長男。斐太中学、東京慈恵会医学専門学校卒。東京で開業医をしていたが戦災を受け、昭和二十年（一九四五）高山市馬場町の父の「大埜間医舎」を継いだ。少年時代から歌を詠み、在京中に終生の短歌の恩師となる芸術院会員・金子薫園と出会った。二十一年（一九四六）鎌手白映ら十一人で飛騨短歌会を結成し主宰に。二十七年（一九五二）高山市文化協会初代会長。高山市公安委員長、同社会教育委員など歴任。

歌集『一つ世界』『白樺』『高原の雲』高山市文化協会文化功労者（昭三〇（一九五五））

【飛騨人物事典】

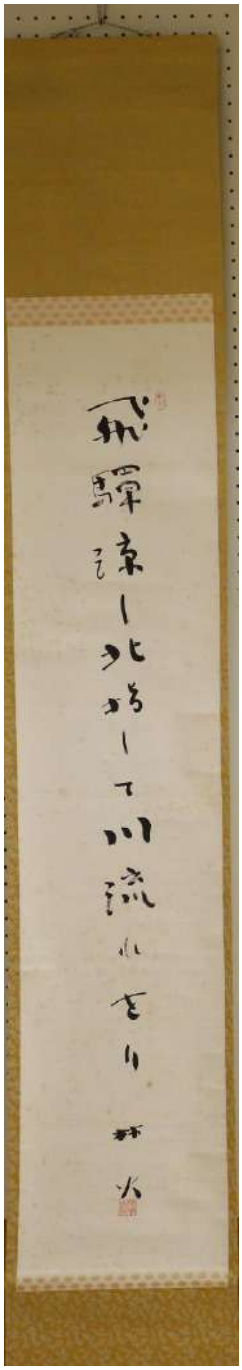
天辺に　とりのこされし　柿ひとつ
みかえる人の　なくてうれおり　　霽江

十七、大野（おおの）　林火（りんか）

明治三十七年（一九〇四）三月二十五日～昭和五十七年（一九八二）八月二十一日

俳人。神奈川県生。本名は正（まさし）。東大経済学部卒業。臼田亜浪に師事し俳誌「石楠」に俳句・評論を発表。昭和十四年（一九三九）第一句集『海門』出版、二十一年に俳誌『浜』を創刊し主宰、後進の指導に当ったほか「俳句研究」「俳句」の編集長をつとめるなど中正的確な鑑賞力に定評がある。五十三年に俳人協会々長。『大野林火全句集』の著書がある。

【美術人名辞典】



飛騨涼し　北指して川　流れをり　林火

十八、日野大納言（弘資）

ひのだいなごん　ひろすけ

元和三年（一六一七）一月二十九日～貞享四年（一六八七）八月二十九日

江戸時代前期の公卿・歌人。日野光慶の子。祖父日野資勝・中院通茂にまなび、後水尾上皇から古今伝授をうける。正二位、大納言。歌学書に『日野弘資卿口儀』がある。

【日本人名大辞典抜粋】

水きよき　飛騨の細江に　山ながら
うつる紅葉も　いく千代の秋　弘資

十九、飛鳥井大納言（雅章）

永正十七年（一五二〇）九月二十二日～文禄三年（一五九四）一月十二日

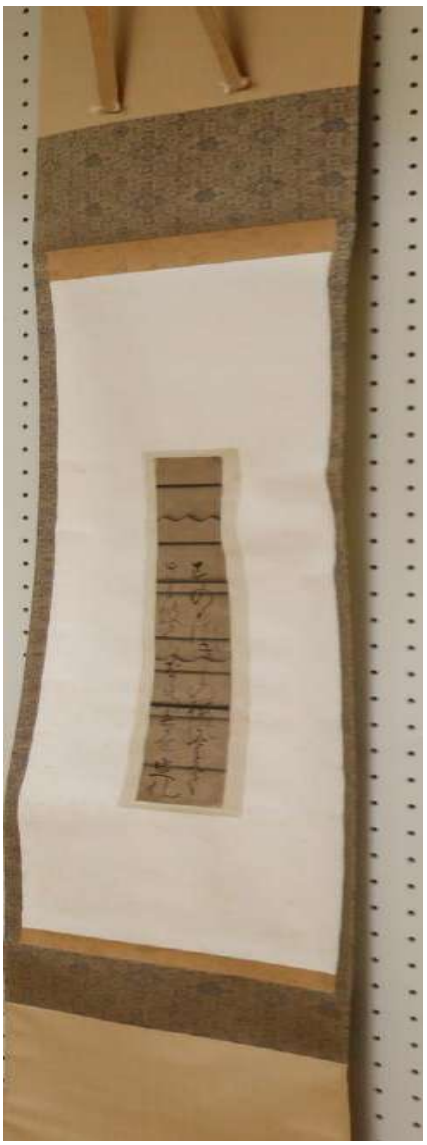
安土・桃山時代の公卿・歌人。雅綱の子。初名は雅教、法名は了雅。権大納言正二位となる。和歌・蹴鞠を能くし、武家伝奏も務めた。後陽成天皇の聚楽歌会に供奉する。

【美術人名辞典】

春風に　にほひをとめて　位山
深きめぐみに　色をみるかな　　稚章

二十、寒厳（かんげん）　和尚（おしょう）

安国寺三十九世。寺伝によると享和元年九月十八日飛騨安国寺に住職として入山。天保元年四月二十八日、丹波にて遷化されている。詳細不明。



曾聞窓嶺嶮
西竺路漫々
適過騎鞍道
疑為異城看
野麦道中　寒厳

かつてそうれい　けわしときく
さいじくのみち　まんまんたり
まさにきあんの　みちをすぎるに
うたがうらくは　いいきをみんとす

かつて窓から見た山は険峻だと聞いている。仏教の伝来した道は、遠く長い。今まさに乗鞍の道を通っているが、まるで西域を見ているような思いだ。

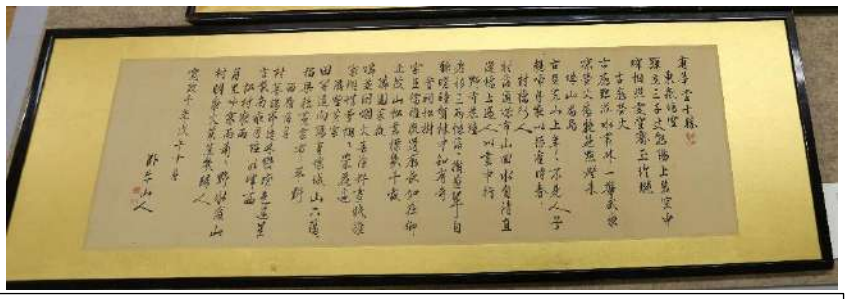
二十一、赤田　臥牛（あかだ　がぎゅう）

延享四年（一七四七）～文政五年（一八二二）

名は朱義・元義　通称は赤田新助　号は臥牛山人等。

幼いころより学問の才があったが、家業の酒造業を重んじる父親は臥牛が学問をすることを喜ばなかった。飛騨にあって、学問の師もなく、また共に学ぶ学友もない。この状況に手を差し伸べたのが酒造業・養蚕業を営む文人津野滄洲であった。彼の導きで尾張の松平君山、浅井図南らの儒学者に学ぶ機会を得、臥牛の才能は花開く。飛騨に赴任した郡代も臥牛に学ぶようになり、後に田口郡代の援助を受け学問所静修館を開設し飛騨の学問の中心となった。

【飛騨人物事典】



有莘堂十勝　「三福寺十勝」

東嶽晴雪
壁立三千丈
中峰相照？

朝陽上碧空
雪齊玉玲瓏
（玲瓏　金属や玉が輝く模様）

古廟螢火
古廟臨流水

叢林一鬱哉
夜涼螢人動
橙是點燈來
（哉　感嘆の意）

城山蜀鳥
古壘荒山上
子規啼月夜
（蜀鳥　ほととぎす。子規とも書く）

年々不見人
以怨奮時春

村橋行人
村落通城市
直從橋上過

山回水自清
人以畫中行
（城市　昔の城下）

野寺晨鐘
老杉三両株
自聽曉鐘聲

落々攢葱翠
林中知有寺
（葱翠　ねぎの緑色）

管祠松樹
宗臣儒雅流

遺廟長如在
仰止彼山松
蒼標幾千載
（千載　長い年月）
（遺廟　この場合古墳のことでなく菅原道真を祭った祠。現在の堀之内宮司宅か向山。天満宮から来た神主がいたのかも知れない。その東方に老田松があり、この詩を詠んだものと思われる）

隣圃菜花
隣並閑烟火

春深好畫眠
誰家蝴蝶夢

栩々菜花辺
（栩々　くぐる）

満野黄稲
田開遠向陽

霄壤城山下
蕩々稲粱秋

黄雲布平野
（蕩々　広大で穏やかな）

西嶺落月
村庵鶴聲遠

林巒曉色迷
星言載南畝

月握數峰西
（林巒　林の峰／星言　星輝く様）

松村夜雨
月黒聞寒雨

蕭々野水濱
山村明夜火

蓑笠幾歸人
（蕭々　ものさみしい雨の降る様）

寛政十年戊午十月

臥牛山人

二十二、岩佐（いわさ）　一亭（いってい）

安永八年（一七七九）八月二十四日～安政五年（一八五八）十一月二十八日

書家。高山三之町の呉服商・荒木屋に生まれる。通称は市右衛門。名は善倫。字は君明。号を喬村堂。八賀屋仁助（牧牛舎裡布）に書を学ぶ。後に弘法大師流入木道五十世で尾張蜂須賀の蓮華寺住職・大道定慶の内弟子となり、大師流書道を修業し入木道五十一世。天保三年（一八三二）上京して「松聲」の二字を絹本に揮毫し、仁孝天皇に捧上。山岡鉄舟の師。

【飛騨人物事典】

吉村（よしむら）　豊足（とよたり）

生年不詳～万延一年（一八六〇）十月四日

歌人。吉城郡釜崎村の人。号は披本。喜右衛門と称する。田中大秀に和歌を学ぶ。享年七九。

【斐山語草・飛騨人物事典】

蓑石山記　書　岩佐一亭　文　吉村豊足

岩屋虔村の川辺に蓑石といふ有・・・

二十三、蒲（かば）　八十村（やそむら）

文化九年（一八一二）十二月十五日～慶応二年（一八六六）五月二七日

酒造業・歌人・手習い教授・能書家。号を田面舎・巨木蔭・樅蔭・樅亭・宜木川・漁叟・胡蝶亭。赤田章斎に漢学、岩佐一亭に書を学び、田中大秀の門では四高弟の一人と称された。池坊の華道にも優れた。文集、随筆等多数。

【高山市史・飛騨人物事典抜粋】

行末も　長倉山に　年を経て
四方に木垂れる　松の一本

雙六谷の　材木石を
朽ちずして　久しきものゝ　例には
平べき石の積　までとぞ思ふ

藤はし

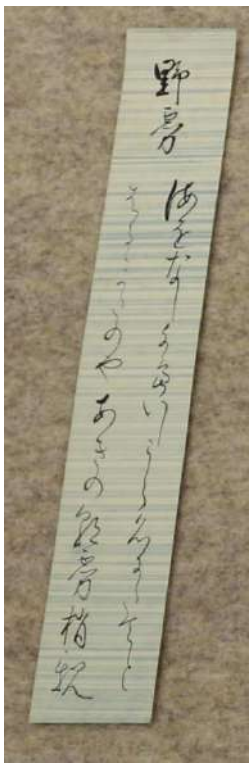
藤かつら　■らさりせば　いかにして
この川の上に　橋をつくらん　八十村

二十四、森野（もりの） 梢隆（すえたか）

生年不祥～大正二年（一九一三）九月

歌人。高山の人。初名は梢親。号を柴籬内。代々農業を営み鉱業・酒造業にも資材を投じる。富田礼彦と吉島斐之に詠歌を学ぶ。

【高山市史・飛騨人物事典抜粋】



野霧

海をなし　千鳥いしうら　名にたてど
晴るゝ片野や　秋の朝霧　　梢親

二十五、小峯（こみね） 大羽（たいう）

明治六年（一八七三）二月十五日～昭和二十年（一九四五）五月二十四日

俳人。画家・郷土史家。東京神田生まれ。名は邦寿。号を大羽楼大羽。東京府立毛筆画伝習所卒。文学を尾崎紅葉、画を狩野洞谷に学ぶ。富岡永洗の藻斉画塾の客員、『風俗画報』を始め新聞、雑誌の挿絵を手掛けるなどした。俳句では二十五歳から新聞、雑誌の選者として活躍し『高潮』を主宰。徳田秋声らと交流。明治四十五年（一九一二）に飛騨を訪れて魅せられた大羽は、大正二年（一九一三）に高山へ転居。飛騨史談会創立者の一人となり『飛騨史壇』の編集を担当。地元の俳句結社の指導なども行い、飛騨の文化に広く貢献。昭和七年（一九三二）に名古屋へ転居。

編著『俳句大観』『東京語字典』『蘭亭遺稿』。

【飛騨人物事典】

山は飛騨の高波と月に晴れがまし

二十六、井上（いのうえ）　靖（やすし）

明治四十年（一九〇七）五月六日～平成三年（一九九一）一月二九日

小説家、詩人。文化功労者、文化勲章受章。北海道旭川町（現・旭川市）生まれ。昭和五年（一九三〇）金沢市の第四高等学校理科卒。井上泰のペンネームで北陸四県の詩人が拠った誌雑誌『日本海詩人』に投稿、詩活動に入る。昭和七年（一九三二）九州帝国大学法文学部中退。京都帝国大学文学部哲学科へ入学、昭和十一年（一九三六）京都帝大卒業後、『サンデー毎日』の懸賞小説で入選（千葉亀雄賞）し、それが縁で毎日新聞大阪本社へ入社。学芸部に配属される。なお部下に山崎豊子がいた。昭和二十五年（一九五〇）『闘牛』で第二十二回芥川賞を受章。昭和三十九年（一九六四）日本芸術院会員となる。昭和五十一年（一九七六）、文化勲章受章。昭和五十七年（一九八二）以降、世界平和アピール七人委員会の委員を務める。

人間が造った
古い歴史と文化の町を
自然が造った
大山脈、小山脈が取り巻いている。

冬になると
山脈という山脈は雪に覆われ
町は隅々まで飛騨の貌を持ち、
優しい人情に鏤められる。

日本列島のほぼ中央に位置し、
フンザ、ギルギットと竝ぶ
世界の山の町・高山。
登山家の脊の美しく見える、
静かな山の町・高山。

井上　靖

二十七、和仁（わに） 市太郎（いちたろう）

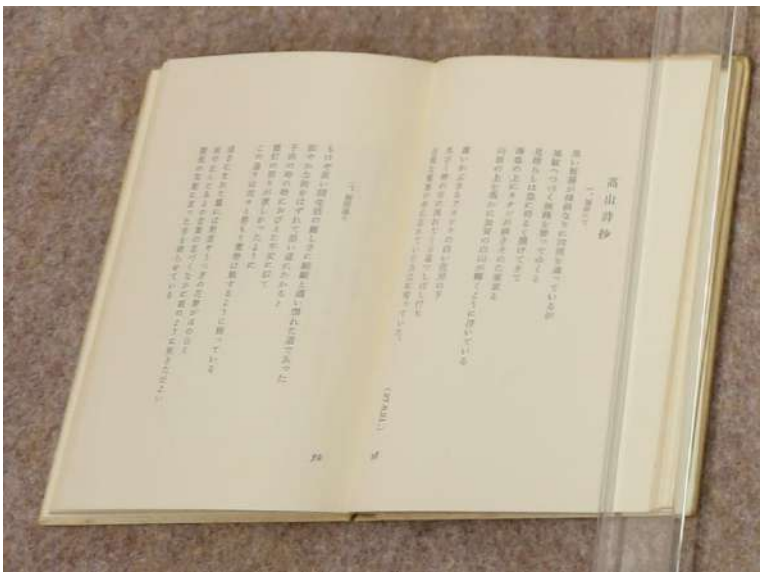
明治四十三年（一九一〇）六月二十五日～没年不明

詩人。船津町生まれ。船津尋常高等小学校補修夜学校卒。東京で謄写印刷を学び昭和八年美踏社工房を創業。『山脈詩派』『飛騨作家』『詩誌・すみなわ』創刊同人。詩集『暮れゆく草原の想念』『私の植物誌』『薄暮記』ほか。岐阜県芸術文化奨励賞（昭五五）。高山市文化協会顕彰（昭五五）。高山市表彰（昭五六）。

【飛騨人物事典抜粋】

和仁市太郎詩集「禁猟区にて」

高山詩抄「城坂にて・神明通り」



二十八、桐山（きりやま）　玄豹（げんぴょう）

弘化一年（一八四四）十月二十日～明治三十年（一八九七）一月二十六日

郷土史家・初代古川町長。高山二之町生まれ。幼名は菊松。名は祐郷、後に源兵衛。号を東梧・鳳陽・竹所・吉城・霧山。広瀬旭荘、劉石秋に詩の指導を受ける。各地を旅し文人との交流が多かった。上海への渡航経験を持つ。明治八年の大火の火元となったため古川町二之町へ移る。同二十二年八月に古川町長。晩年『新撰飛騨誌』の編集のため資料を集めるが、完成を見ず死去。

『金森家譜』『飛騨国司姉小路家系考』『三木氏家系』『新島追慕編』などの著作がある。

【濃飛文教史・飛騨史の研究・飛騨人物事典】

一位之山靈赫然　維神生木稱一位　聞説上古聖明朝
用之為笏典章備　乃知逐歳貢献來　物換星移失傳記
文龜國司再振興　雪玉集中載其事　元和二年復繼之
天顔有喜見詔意　下命椒房賜褒書　于今藏在千光寺
靈山靈木天下囂　宿學紛々未定義　云椶云櫟云水松
强取漢字呼品類　我邦自有我邦音　一位須書一位字
一位木歌　吉城翁

二十九、丸山　晩霞（まるやま　ばんか）

慶応三年（一九六七）五月三日～昭和十七年（一九四二）三月四日

洋画家。長野県生。名は健作。

児玉果亭に師事し、上京して神田勤画学舎に学ぶ。また本多錦吉郎に就き、欧米遊学後、太平洋画会創立に参加。木下藤次郎らと日本水彩画会を設立、水彩画家としても知られる。

【美術人名辞典】

［飛騨景色団扇］

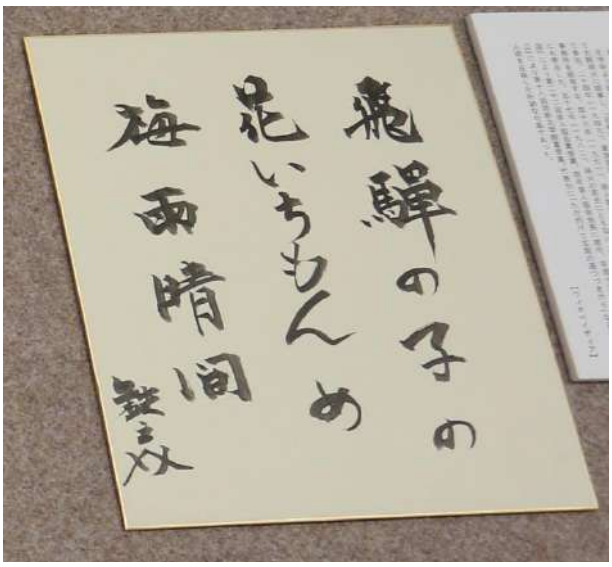
三十、松崎（まつざき）　鉄之介（てつのすけ）

大正七年（一九一八）一二月一〇日～平成二六年（二〇一四）八月二十二日

本名・敏雄。横浜市生まれ。横浜商業専門学校（現・横浜市立大学）卒。

在学中より俳句をはじめ、「馬酔木」に投句。昭和十四年（一九三九）、加藤楸邨の勧めに従って大野林火に師事し、「石楠」に入会。二十二年（一九四七）、復員後に林火の「濱」に同人として参加。二十四年（一九四九）、東京国税局に入局。四十五年（一九七〇）、退職し銀座で税理士事務所を経営する。四十六年（一九七一）、俳人協会設立に参加し理事を務め、俳句文学館建設にも寄与した。五十七年（一九八二）、林火の死去にともない「濱」主宰を継承。同年、『信篤き国』により第二十二回俳人協会賞受賞。同年俳人協会会長に就任。平成十五年（二〇〇三）、『長江』により第十八回詩歌文学館賞受賞。代表句に「ただ灼けて玄奘の道つづきけり」などがあり、人柄を反映した朴訥な句風であった。

【ウィキペディア】

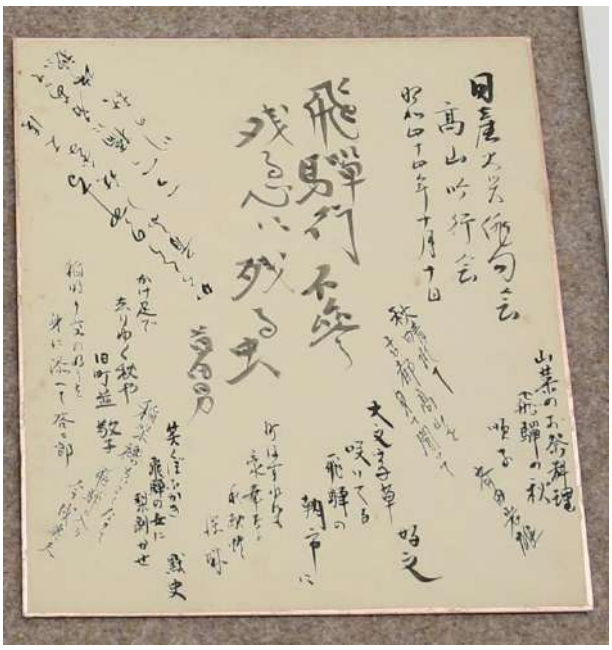


飛騨の子の　花いちもんめ　梅雨晴間　　鉄之介

三十一、中村（なかむら）　草田男（くさたお）

明治三十四年（一九〇一）七月二十四日～昭和五八年（一九八三）八月五日

俳人。中国福建省厦門の日本領事館で清国領事の長男として出生。本名、清一郎。師系は高浜虚子。三歳の時母と帰国し、松山中学、松山高等学校を経て東大独文学科に入学。西欧の思想文学に親しみ、ニーチェ、ヘルダーリン、チェーホフ、ドストエフスキーなどの影響を受ける。同時に持病の神経衰弱に悩まされ、休学の後国文学科に転科。斎藤茂吉の歌集『朝の蛍』を読んで実相観入の写生歌に眼を開く。



飛騨行不参　残る心に　残る虫　草田男

三十二、後藤（ごとう）　重郷（しげさと）

文化九年（一八一二）十二月二三日～明治十七年（一八八四）十月二日

酒造業・歌人。号を萩垣内・瑶斎。柳名を穂積。文政十年（一八二七）田中大秀に入門。天保年中に本居内遠の入門、国学と和歌を学ぶ。関流の高木允胤に算法を学ぶ。

【高山市史・飛騨人物事典抜粋】

霧海

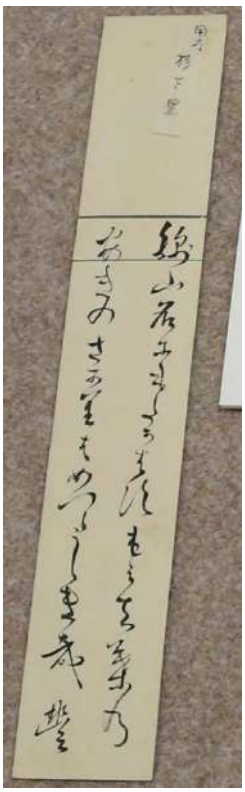
奥久手に　朝霧こめて　おちの山
しまとも見ゆる　きりのうみかな

三十三、杉下（すぎした）　太郎右衛門（たろうえもん）（豊）

慶応三年（一八六七）九月八日～大正七年（一九一八）五月四日

豪農・国会議員。国府村打江の人。杉下家二十二代。亭号を俵石堂、号は耕雲・漣園。アメリカの主要都市の産業を視察し、帰国後は大日本農会の特別委員。明治三十一年（一九八九）に衆議院議員当選。県農工銀行監査役、飛騨産業銀行の初代頭取など歴任。詩歌、写真、書画などを好む。

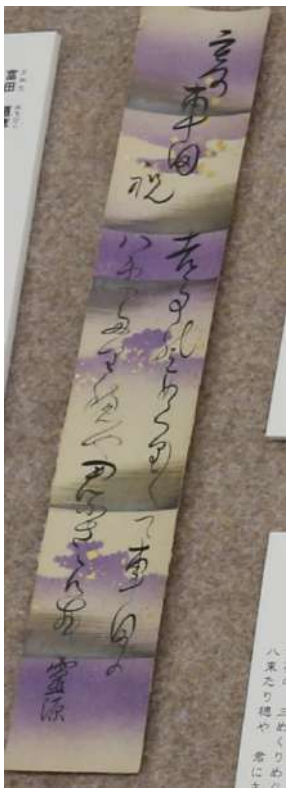
【飛騨偉人銘々伝・飛騨人物事典】



錦山　名にもたがわず　もみじ葉の
あきのさかりは　めずらしきかな

三十四、都築（つづき）　霊源（れいげん）

正宗寺の住職。永平寺七十五世山田霊林禅師の本師。詳細不明。



寄車田祝

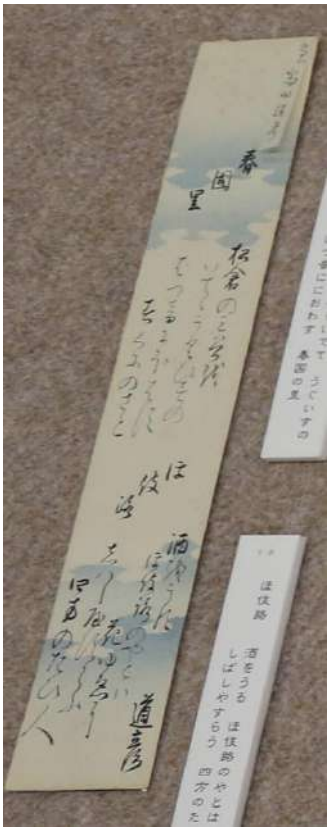
吉事の　三めくりめぐりて　車田の
八束たり穂や　君にささげむ

三十五、富田（とみた） 道彦（みちひこ）

天保七年（一八三六）十二月四日～明治二十七年（一八九四）三月六日

高山の人。富田礼彦の長男で豊彦の父。字は義卿・鯉沼。皇・漢学を父に学ぶ。

【高山市史・飛騨人物事典抜粋】



春国里

松倉の　三谷をいでて　うぐいすの
はつ音ににおわす　春国の里

ほ伎路

酒をうる　ほ伎路のやとは　放えに
しばしやすらう　四方のたび人

三十六、富田（とみた）　豊彦（とよひこ）

万延一年（一八六〇）三月四日～昭和十五年（一九四〇）十一月十八日没

神職・国学者。富田礼彦の孫。号を文坡。祖父礼彦を始め佐々木弘綱、山崎弓雄らに国学や和歌、漢学などを学ぶ。日枝神社々司。斐太中学教諭など歴任。荏名門の文台を継承し門人を指導した。

『岐阜県飛騨国大野郡史』編纂委員。著書に『飛騨古今詠歌人名録』『まゆみ園集』等。

【高山市史・飛騨人物事典抜粋】

［斐太名所四季図］

［（右隻　第一扇）　花里天満宮］

神詣で　行き交う人の　袖摺りも　香あいたる　梅の花里

【天満宮にお参りするために行き交う人たちの袖がすりあって、梅の香りが立つようだ。梅の花咲く花里であるから】

菅原道真が太宰府へ左遷されたとき、道真の三男・兼茂も飛騨権掾（ごんのじょう）に身分を落とされ花里に謫居（たっきょ）した。道真の死後、その他に霊祠（れいし）を建てたのが天満宮の始まりと言われている。道真が梅を好んだことから、各地の天満宮には梅が植えられることが多い。飛騨天満宮にも紅梅・白梅が植えられ、春には梅の香が漂う。

［（右隻　第二扇）　桃原　小坂湯屋］

自ずから　物は言わねど　薬湯に　道開けけむ　桃原の里

【自分から言い立てることはなくても、温泉のおかげで道が開けていった桃原の里】

現在でも、湯屋温泉があり湯を楽しむ人でにぎわっている。

［（右隻　第三扇）　桜野］

幾春か　国府野（こうの）の桜　咲き散りて　広瀬の水に　映り来にけむ

【幾春もの間、国府野の桜は咲いては散り咲いては散りを繰り返し、広瀬の水面に映ってきたのだろう】

南北朝の末頃、広瀬の領主であった左近将監（さこんのしょうげん）利治によって吉野の桜が移植されたという。江戸時代には桜の名所として知られ、多くの和歌が遺されている。明治初年に開墾のためほとんどの桜が伐採されたが、その後再び植樹されて桜野公園として整備されている。今でも春になると多くの花見客で賑わう。

［（右隻　第四扇）　国分寺］

御佛も　国の宝と　成りしより　瑠璃の光や　照り勝るらむ

【御仏が国の宝となってから、瑠璃の光がより一層輝くようだ】

国分寺の本尊は、明治三十四年（一九〇一）に国の重要文化財に指定されている。句中の「国の宝」はこのことを示している。同じく「瑠璃の光」は、本

尊が薬師瑠璃光如来であるため。

［（右隻　第五扇）　浅水橋（あさんずはし）］

益田川　浪も轟（とどろ）の　五月雨に　名のみかかれる　浅水の橋

【五月雨が降り波音が轟く益田川に、橋は架からず名前だけが書かれている浅水の橋】

現在、下呂市小坂町にある朝六橋は、近世になって整備された道に造られたものである。古くは下呂市萩原町上呂にあったといい、飛騨代官・長谷川忠崇の建てた碑が残っている。古くから名所として知られ、催馬楽（古代の楽曲）や『枕草子』にも登場するほか、多くの和歌や漢詩が作られた。

催馬楽に「朝六の橋の　轟轟（とどろとどろ）と　降りし雨の　経（ふ）りにし我を　誰ぞこの　中人（なかひと）立てて　御許（みもと）の貌（かたち）　消息（しょうそこ）し弔いに来るや　さ公達や」とあるのを踏まえての歌と思われる。

※注　朝六橋は福井にもあり、本来の枕詞はこちらを指す。

［（右隻　第六扇）　笠嶽（かさがたけ）］

天そそり　御空に笠を　開きつつ　神代の雪を　かざす高山

【天高くそびえ立ち、空に向かってかさを開きながら、神代の昔から積もっている雪をかざす高い山】

笠ヶ岳は、飛騨山脈（北アルプス）・穂高連峰に連なる山で標高二八九七メートルの山である。なだらかな円錐形の山で、どこから見ても菅笠に似ていることが名前の由来と言われる。

［（右隻　第七扇）　走渕神社（はしりぶち）］

禊する　天津菅生の　河社　松影清き　水の色かな

【天高くにある数河で、禊するかのように川の中に建つ社。松影が映る川はなんと清い水の色か】

走渕神社は、高原川に走渕と呼ばれる深みがあり、その端にある島に建てられていた神社である。参拝するのに危険なため大正時代に現在の場所へ移された。

［（右隻　第八扇）　平湯大瀧］

鞍ヶ根の　雪も砕けて　落つればや　夏なお寒き　滝つ白波

【鞍ヶ根（＝騎鞍嶽・乗鞍岳を指す）の雪が砕けて落ちるのだろう。夏でも寒い滝の白波】

断崖からほぼ垂直に流れ落ちる幅六メートル高さ六四メートルの滝。新緑・紅葉・雪景色と四季折々の美しさを見せる。

［（左隻　第一扇）　七夕岩］

年の緒の　長き契りを　岩角に　かけた映えたる　御しめなるらむ

【長い年月にわたる（彦星・織姫の）約束を心にかけているので、岩角に掛けても見映えのする注連縄になっているのだろう】

毎年八月六日に大八賀川の両岸にある男岩と女岩に注連縄を張る七夕の行事が行われており、高山市指定無形民俗文化財になっている。注連縄には提灯や藁細工の馬や糸車が吊るされ、五穀の豊穣を祈るという。かつては次の年の七夕まで縄が切れなければ豊作といわれていたが、現代では危険性を考慮して七夕が終わると取り外している。

［（左隻　第二扇）　中山七里］

岩走る　水に競いて　啼く蝉の　声の中行く　中山の路

【岩の上を走る水音と競い合うように啼く蝉の声。その声の中を行く中山の道】

中山七里＝下呂・帯雲橋から金山・境橋までの七里（約二八キロメートル）をいう。景勝地として知られる。

［（左隻　第三扇）　琴渕（ことがふち）］

松風の　秋を奏ずる　琴渕は　水の調べの　清くも有るかな

【松の梢を渡る風が秋を奏でる琴渕は、水音も清いものである】

小八賀川にある渕。名前の由来は、渕のそばに琴に似た形の岩があるからとも、水底から琴の音が聞こえるからとも言われている。高山市指定名勝である。

［（左隻　第四扇）　辻の池］

手向路の　岩根踏みさき　降りくれば　木の間に澄める　辻の池水

【峠道の岩を踏んで降りてくれば、木々の間に澄んだ水を湛えた辻の池が見える】

辻の池＝現代の通称「美女が池」、朝日町見座。美女が池は、最近付けられた名前である。春には水芭蕉が咲き、夏は涼しく、散策に訪れる人が多い。

［（左隻　第五扇）　東照宮］

露霜の　染めて隠るは　広前の　秋の錦の　帳（とばり）なりけり

【神様の御前を隠すのは露や霜で染められた秋の錦の帳（＝紅葉した木々）なのだ】

高山城主三代目・金森重頼によって創建。一時すたれたが、文化十五年（一八一八）に再興し、現在の形になる。春には桜、秋には紅葉が美しい。

［（左隻　第六扇）　本母里（ほのぶのさと）］

衣打つ　音も本母の　秋風に　夜寒を誘う　冬頭（ふいとう）の里

【衣を打つ音がほのかに本母の里から秋風に乗って冬頭の里まできこえてくる。その音に夜寒を誘われる】

本府が町名の由来ともいう。北にある三枝山が北風を遮り、東西南が開けた地である。冬頭町は、本母町の南に隣接する町。「衣打つ」は、固く粗い布を木槌で叩いて柔らかくすることで、冬支度として行われた。

［（左隻　第七扇）　細江］

名細（くわ）しき　小しま少女（おとめ）が　眉引きの　細江の月に　菅鳥の啼く

【名も美しい小さな島の乙女の眉のように細い月が出ている。その細江の月に菅鳥（＝一説にはオシドリ）が啼いている】

川の跡地を田としたが、杜若や水鳥が多く見られたという。景勝地であったため、この地を題材とした多くの和歌や漢詩が作られている。万葉集の「白真弓　斐太の細江とかずとりの　妹に恋ふれか　眠（い）を寝かねつる」をふまえた歌とも思われる。

［（左隻　第八扇）　洲苔川（すのりがわ）］

洲苔川　蔦の枯葉に　霜冴えて　岡本寒く　千鳥鳴くなり

【すのり川の（川辺に這う）蔦の枯葉が霜で一層色が鮮やかになり、岡本の町は寒く千鳥が啼いている】

源流は、源氏岳から出て松倉谷を経て越後谷に落ち、北に流れる。西之一色町・上下岡本町・冬頭町・本母町を通り宮川へ合流する。『斐太後風土記』には、すのり川で採れるものとして「ハエ・ウグイ・チチカブリ・ゴリ・フナ・雑魚・青貝・蜆・酸海苔（すのり）」が挙げられている。川の名は酸海苔（すのり）（苔）が採れることに由来している。

三十七、前田（まえだ） 光次郎（みつじろう）（万岳（ばんがく））

明治二十八年（一八九五）十二月十一日～昭和三十年（一九五五）四月十七日

高山商工会議所事務局長・飛騨山岳会員。久々野村反保生まれで昭和七年（一九三二）高山へ転居。号は万岳。斐太中学、法政大学経済学部（特待生）卒。

東京税務署勤務を経て帰郷し、昭和七年斐太通信社を設立、雑誌『飛騨公論』創刊。二十一年（一九四六）高山商工会議所設立と同時に常務理事となり後に事務局長。傍ら斐太高校夜間部の講師。乗鞍岳奥千町の小屋造りなどに携わった。十六年（一九四一）発足の飛騨文化連盟の発起人。油絵や版画でも知られた。

【巴陵群像】

［高山市鳥観図］

第三十回　近代文学館企画展

「大埜間霽江の時代」

平成三十一年三月二十三日（土）～二十四日（日）　於　高山市図書館「煥章館」

一、大埜間（おおのま）　霽江（せいこう）

明治三十二年（一八九九）四月五日～昭和五十七年（一九八二）六月二十九日

内科医・歌人。丹生川村（現高山市）法力出身で高山市馬場町二に居住。岩之助の長男。斐太中学、東京慈恵会医学専門学校卒。東京で開業医をしていたが戦災を受け、昭和二十年（一九四五）高山市馬場町の父の「大埜間医舎」を継いだ。少年時代から歌を詠み、在京中に終生の短歌の恩師となる芸術院会員・金子薫園と出会った。二十一年（一九四六）鎌手白映ら十一人で飛騨短歌会を結成し主宰に。二十七年（一九五二）高山市文化協会初代会長。高山市公安委員長、同社会教育委員など歴任。

歌集『一つ世界』『白樺』『高原の雲』高山市文化協会文化功労者（昭三〇（一九五五））

【飛騨人物事典】

のぼりつめ見かへる坂の新雪に
みだれて寂し吾のあしあと　霽江

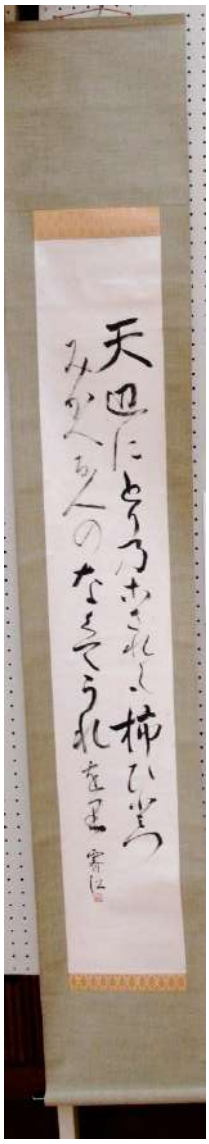
没後、大埜間家庭に建立

酒のみてよしやとたつぬる君がこえ
とわに聞きえす雪降り志(し)きる　霽江

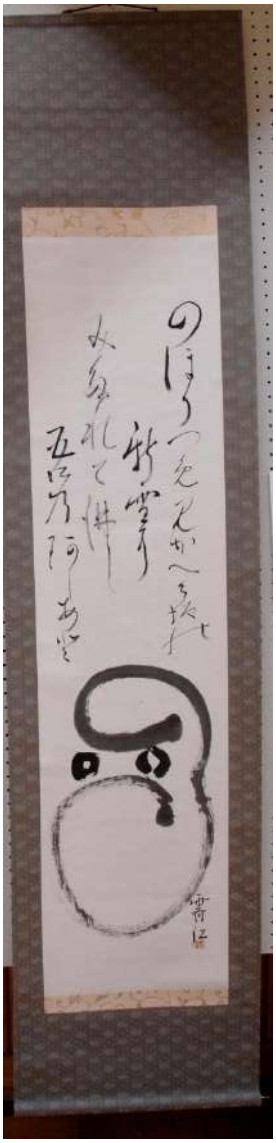
三福寺町、曙橋西に位置する、都竹豊治氏宅入口脇にこの歌碑がある。飛騨短歌会創始者の大埜間霽江を師とする都竹豊治氏が、自刻し自ら建てたもので有る。この歌は、酒を好んだ都竹豊治氏の実父が、主治医の大埜間霽江に亡くなる前に尋ねた言葉を詠ったもの。

天辺にとり残されし柿ひとつ
みかへる人のなくてうれお里(り)　霽江

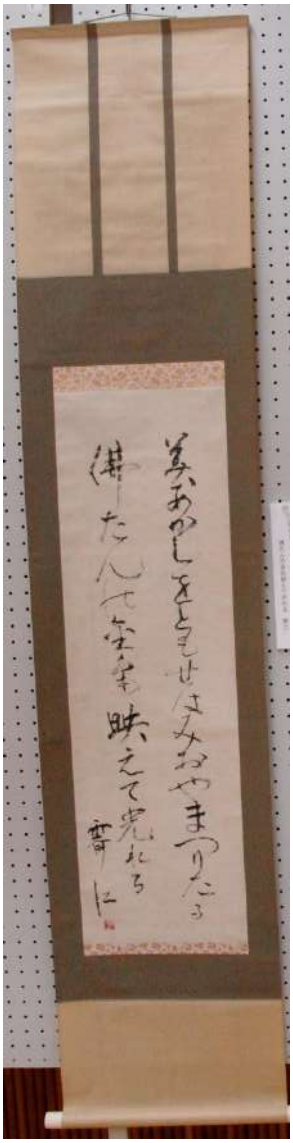
丹生川町北方の正宗寺境内に、昭和四十七年（一九七二）春、飛騨短歌会有志により、飛騨歌壇に盡された業績を讃え、大埜間霽江の出生の地に建設した。



天辺にとりのこされし柿ひとつ
みかへる人のなくてうれお里（り）　霽江

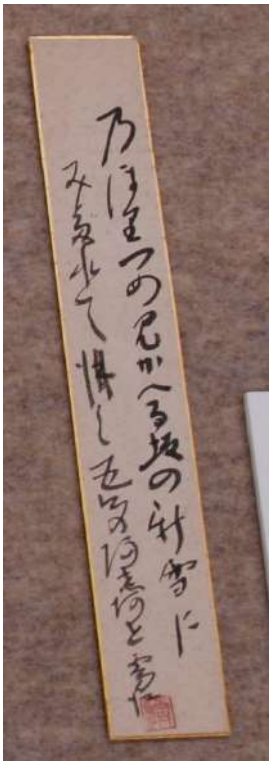


のぼりつめ見かへる坂の新雪に
みだれて寂し吾のあし阿と　霽江

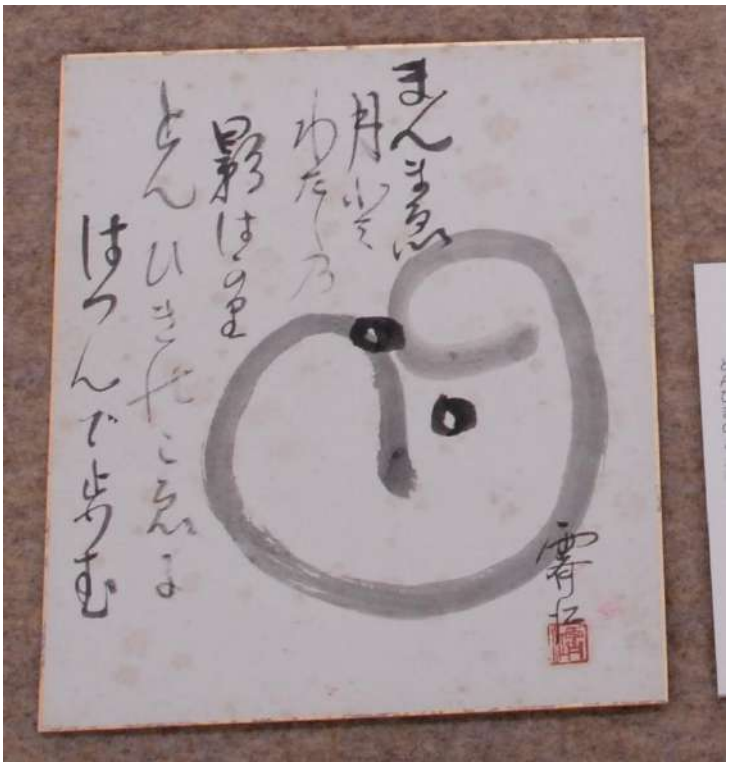


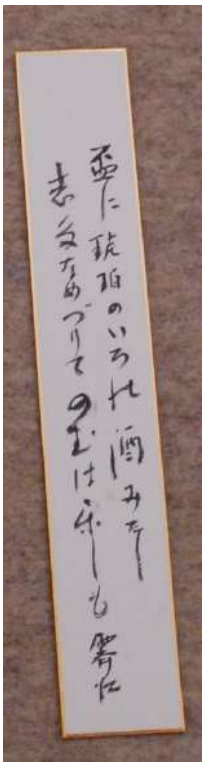
美あかしをともせはみおやまつりたる
佛たんの金色映えて光れる　霽江

［短歌等貼り交ぜ屏風］（大埜間霽江・楽杏）



のぼりつめ見かえる坂の新雪に
みだれて淋し吾のあしあと　霽江

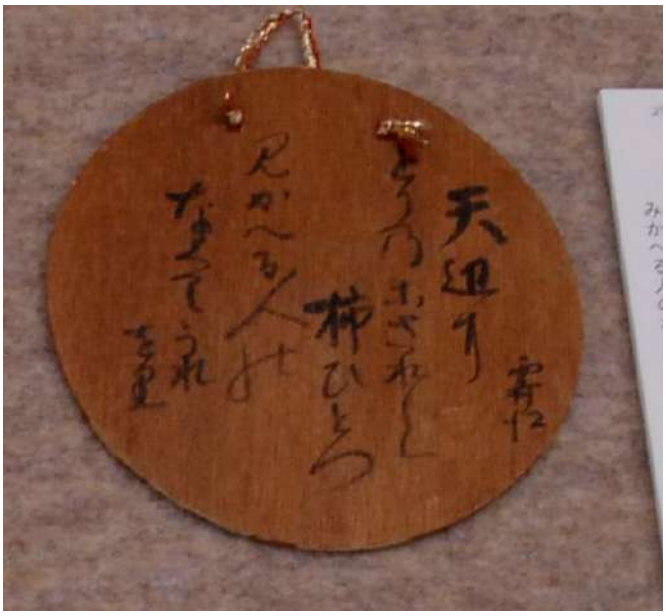




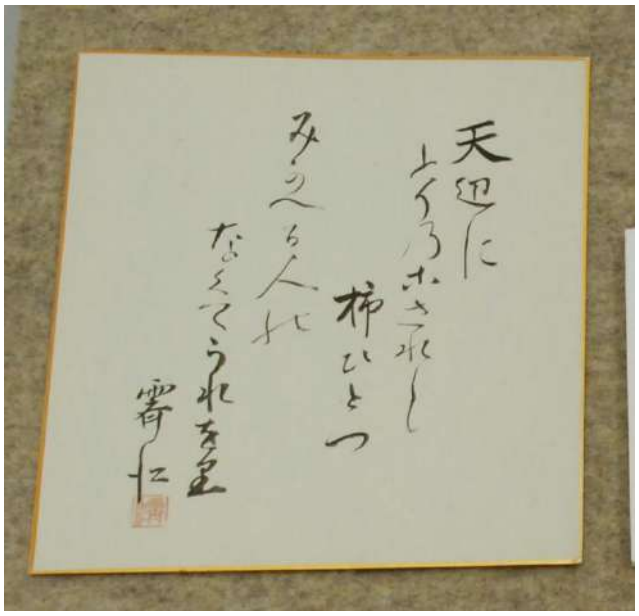
さかつきにこはくのいろの酒みたし
志多（した）なめづりてのむは楽しも　霽江

まんまるい月とわたしの影はか里（り）
とんひきのこえにはづんで歩む　霽江

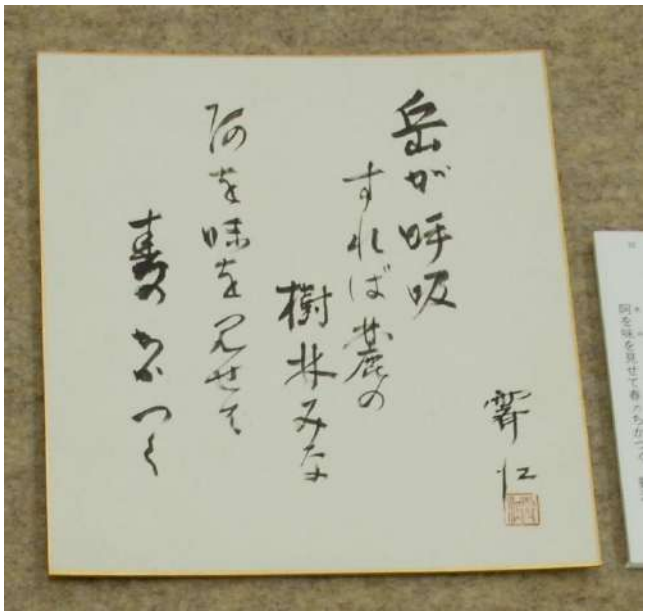
天辺にとりのこされし柿ひとつ
みかへる人のなくてうれお里（り）　霽江



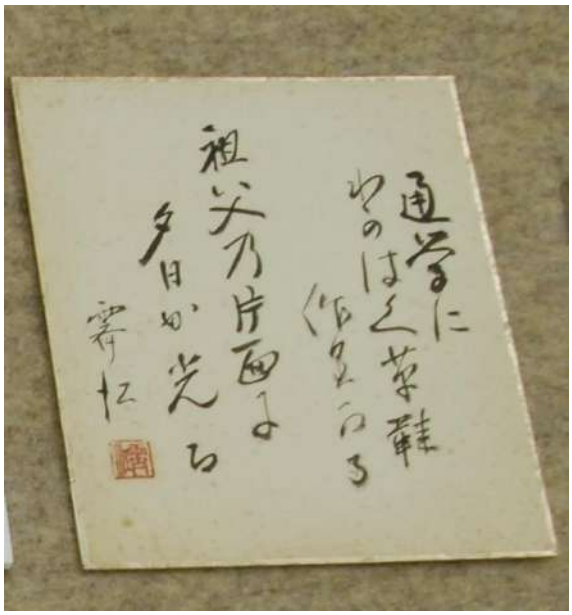
とりのこせしどくだみの花夕やみに
ひとつ淋しわが生にも似て　霽江



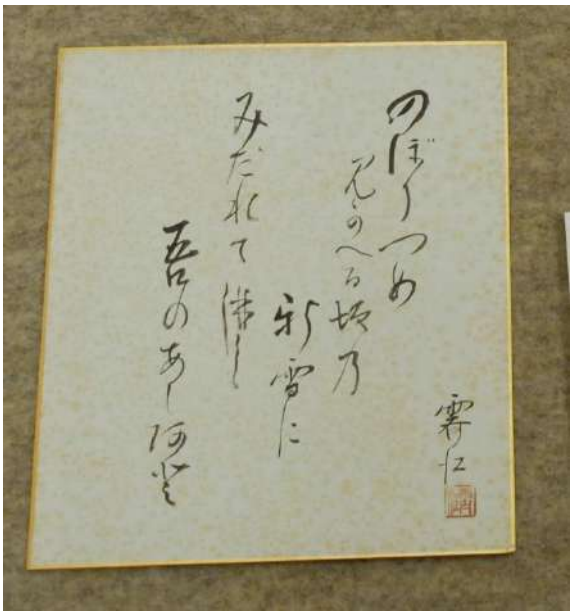
天辺に
とりのこされし
柿ひとつ
みかへる人の
なくてうれお里（り）
霽江



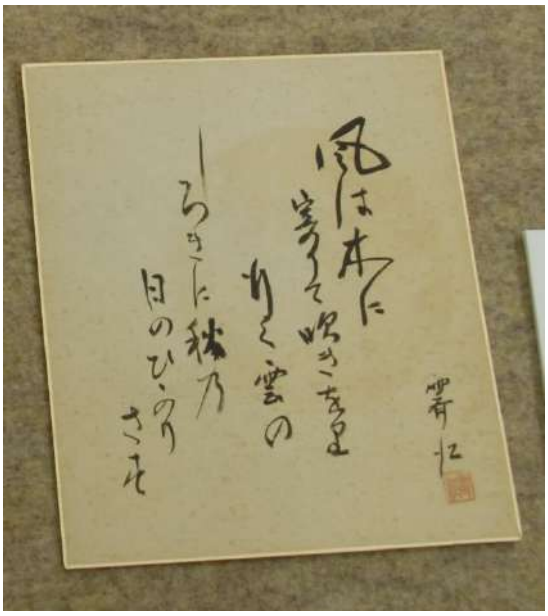
岳が呼吸
すれば麓の
樹林みな
阿（あ）を味（み）を見せて
春にちかつく
霽江



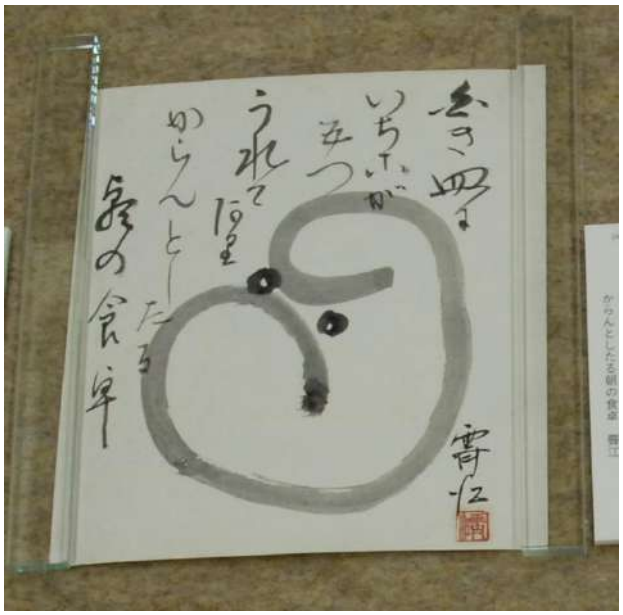
通学に
私のはく草鞋
作里（りた）為る
祖父の片面に
夕日が光る
霽江



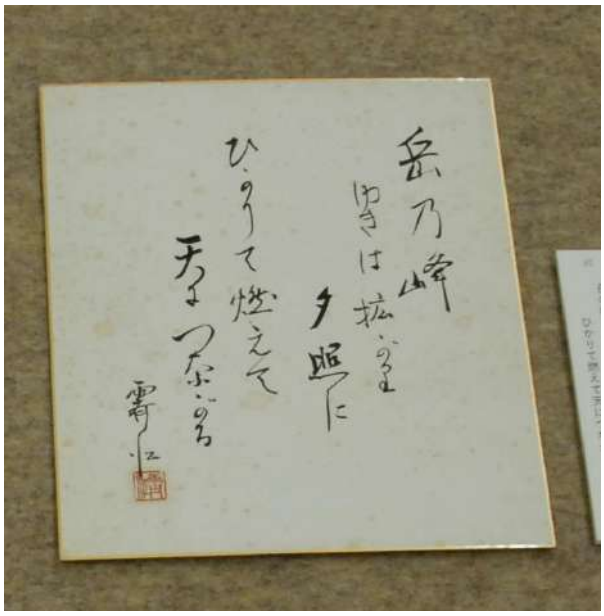
のぼりつめ
見かえる坂の
新雪に
みだれて淋し
吾のあしあと
霽江



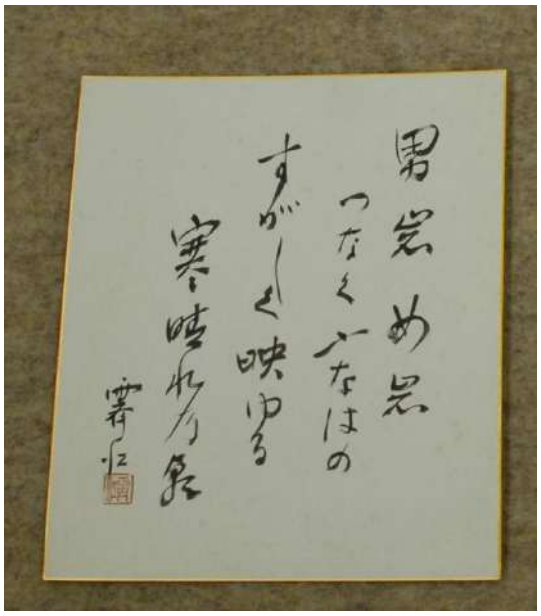
風は木に
寄りて吹きを里（り）
行く雲の
しろきに秋の
日のひかりさす
霽江



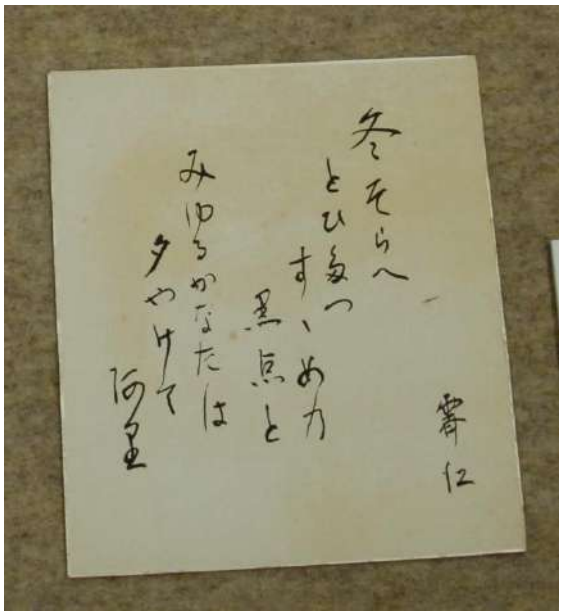
白き皿に
いちごが五つ
うれてあり
からんとしたる
朝の食卓
霽江



岳の峰
ゆきは拡かり
夕照に
ひかりて燃えて
天につながる
霽江



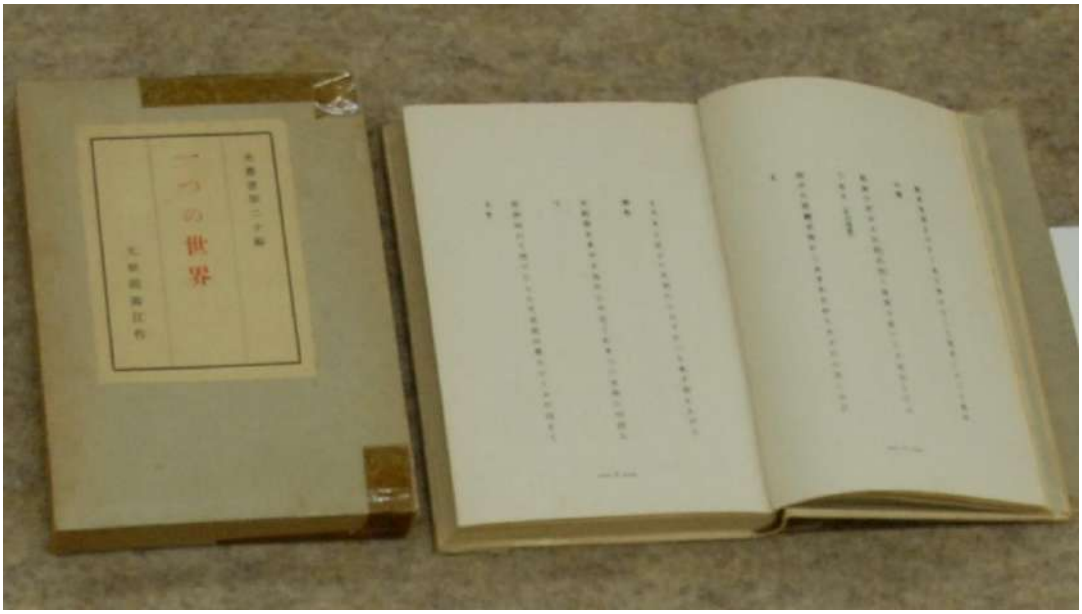
男岩め岩
つなく〆なはの
すがしく映ゆる
寒晴れの朝
霽江



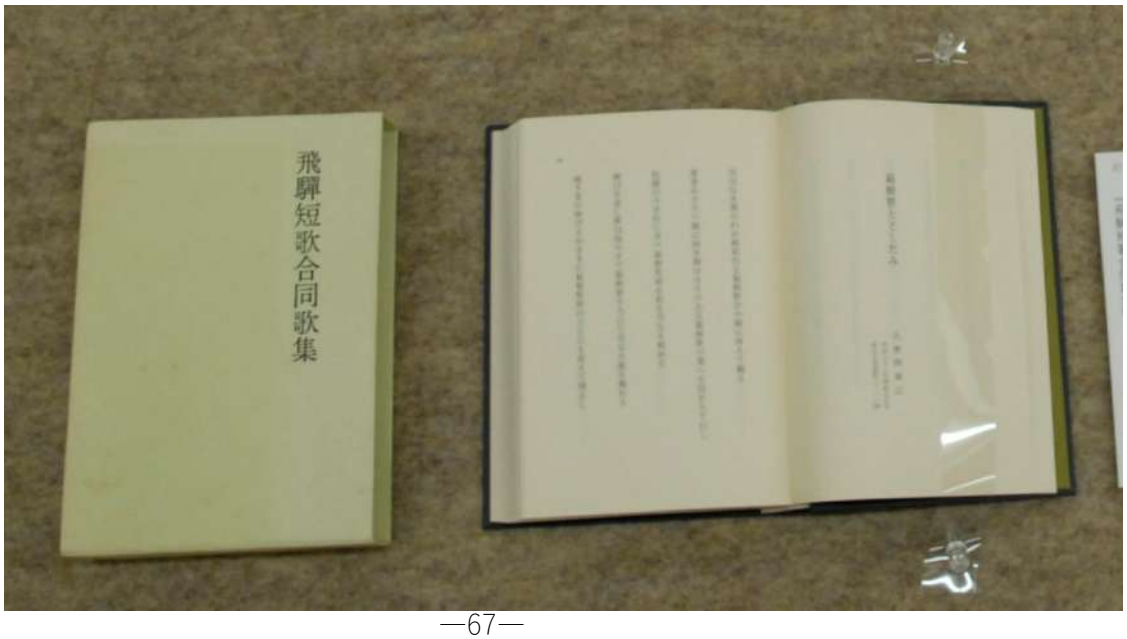
冬そらへ
とひたつすゝめの
黒点と
みゆるかなたは
夕やけて阿里（あり）
霽江

歌集『白樺』

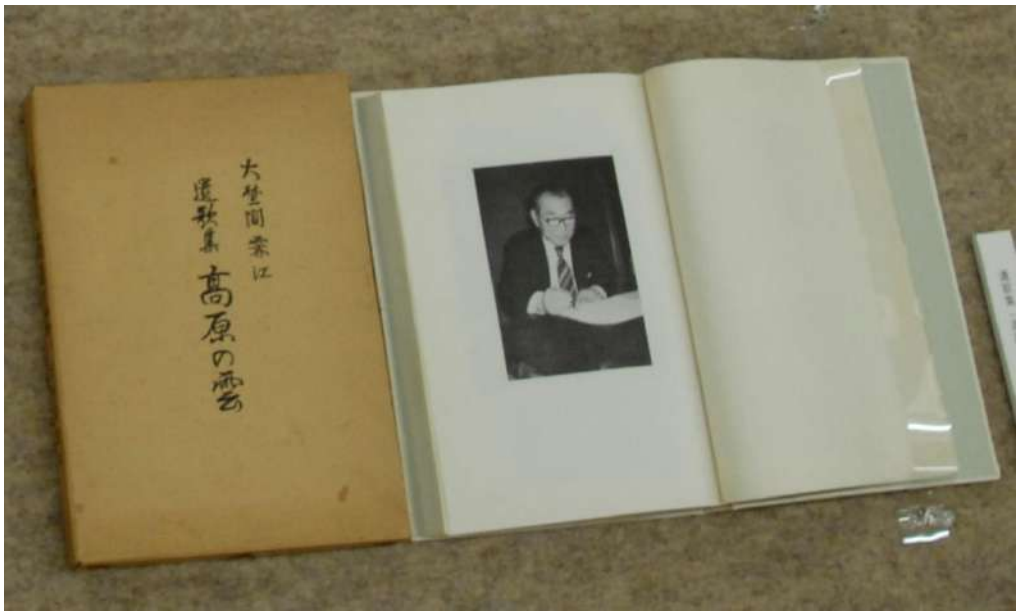
光叢書第二十編「一つの世界」



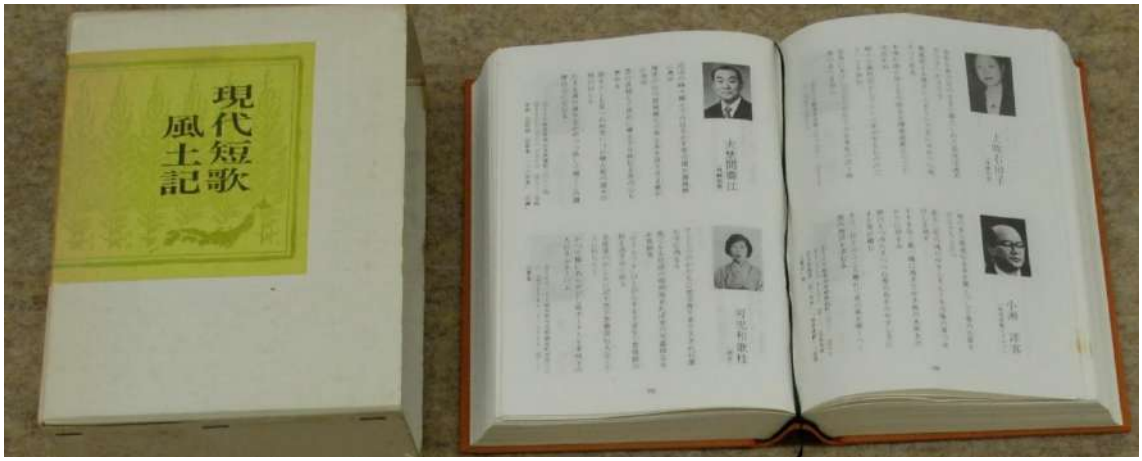
『飛騨短歌合同歌集』



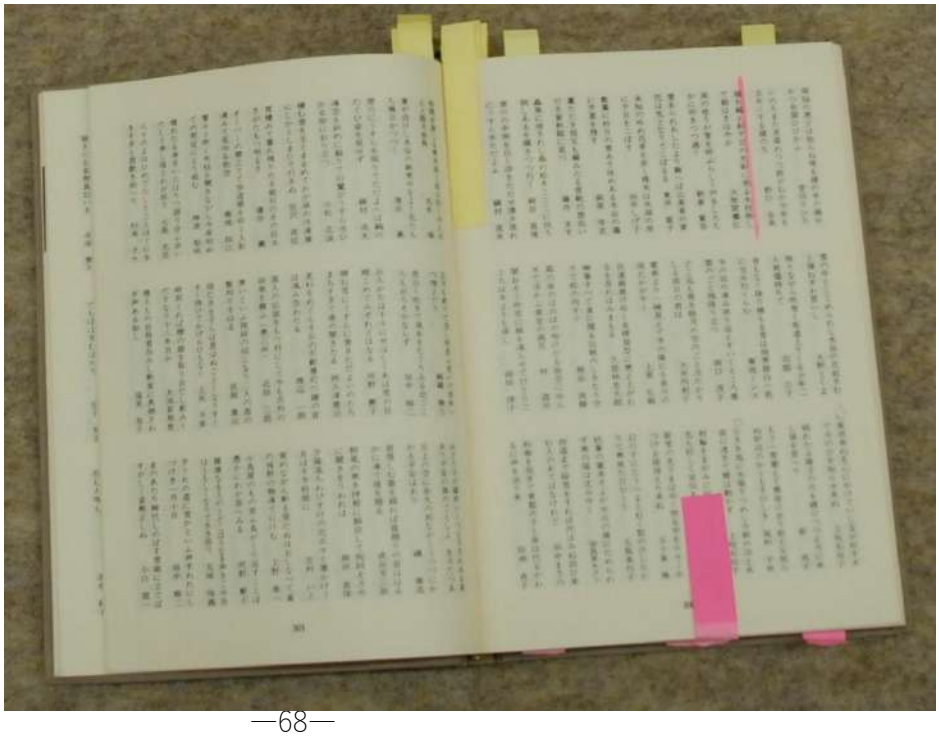
遺歌集「高原の雲」

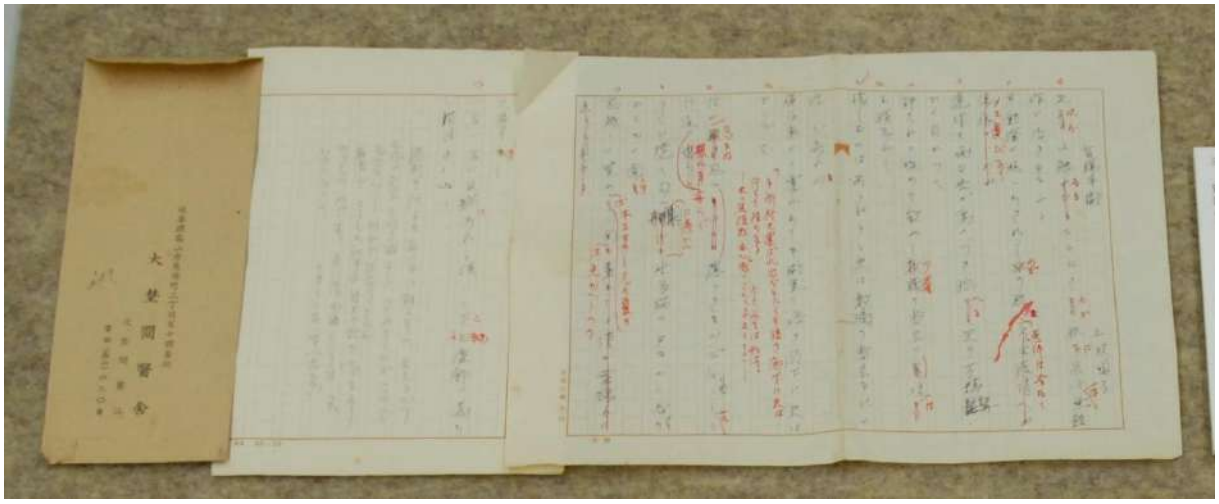


現代短歌風土記（七九〇頁）
文芸出版社（掲載）

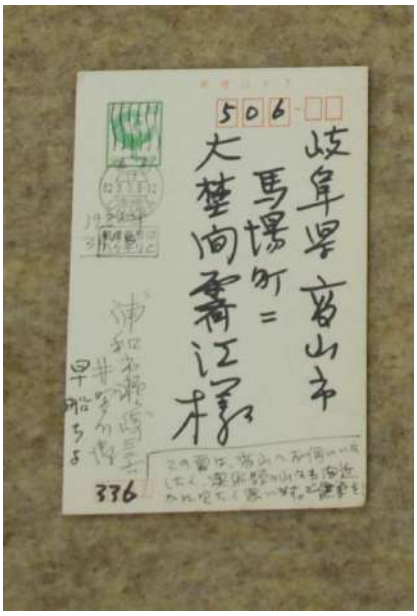


昭和三万歌集（三〇〇頁）
文芸出版社（掲載）





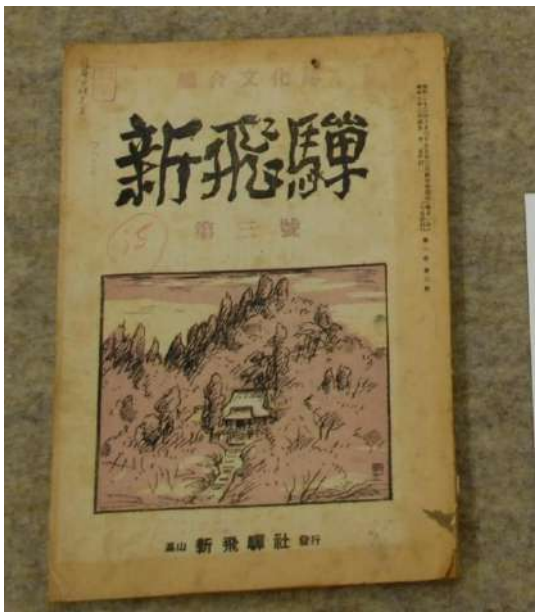
短歌の添削（上牧右田子の作品を大埜間霽江が指導）



武田由平年賀状（大埜間霽江宛）

早船ちよ年賀状（大埜間霽江宛）

『新飛騨』第3号



『悲陀』創刊号

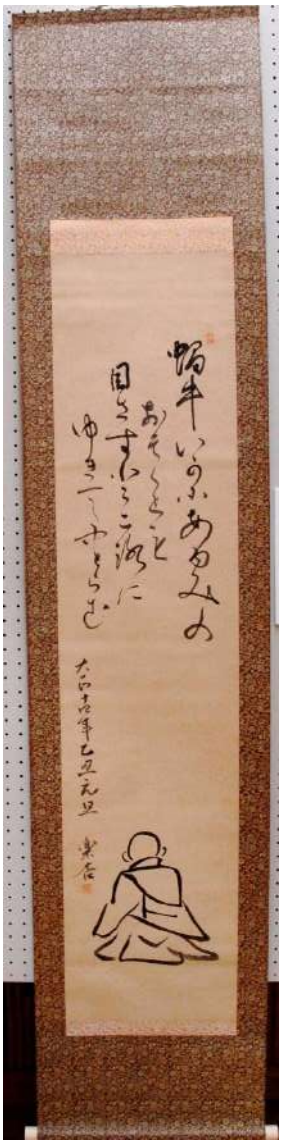
歌集『悲陀』

二、大埜間（おおのま） 岩之助（いわのすけ） （楽杏（らっきょう））

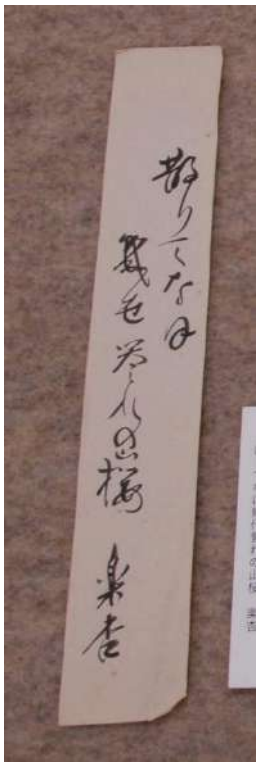
明治八年（一八七五）九月十六日～昭和二十九年（一九五四）十二月十七日

医師。丹生川村下保生まれで高山市馬場町二に居住。旧姓は牛丸。号を楽杏。東京医学専門学校済生学舎、日本医学校に学んだ。郷里の家産が傾いて失意の中で、東宮侍医・鳥山南寿次郎の玄関番となって指導を受け、大正三年医師開業試験に合格。四年高山城坂で開業。十二年に馬場町二へ移転し「大埜間医舎」と称した。ユーモアに富み、患者には事実を告げるなどして患者に慕われた。狂句、狂歌（へなぶり）をよくした。東小学校など多くの学校や公共施設に国旗掲揚台を寄贈し、国家の祝祭日を忘れるなと説いた。

【飛騨人物時点】



蝸牛いかにあゆみのおそくとも
目さすところにゆきてやとらむ
大正十四年巳丑元旦　楽杏



散りてなほ幾代誉れの山桜　楽杏

三、福田（ふくだ）　夕咲（ゆうさく）

明治十九年（一八八六）三月十二日～昭和二十三年（一九四八）四月二十六日

詩人・歌人。高山市大新町一の人。吉郎兵衛（敦雄）の四男。本名は有作。斐太中学、早稲田大学文学部卒。学生時代から人見東明、相馬御風らと交わって「自由詩社」を創設。明治四十二年（一九〇九）読売新聞社に入社して北原白秋、若山牧水らと詩壇の新運動に参加。家庭の事情で大正三年（一九一四）帰郷。瀧井孝作らとの『ツチグモ』の創刊、（大三（一九一四））『飛騨新聞』創刊（昭二二（一九四七））を始め山百合詩社、飛騨山刀倶楽部、飛騨短歌会などを育てて飛騨の文化に大きな足跡を残した。その才能から、飛騨という田舎にこもるのを惜しむ声もあった。昭和十七年（一九四二）高山食品卸市場が設立され常務取締役。

詩集『春の夢』、歌集『山花一束』『山づと』。

鼻液ひれば茶の木畠より翔ひたちて
はたたき寒き鴨のひとむれ

遊び山のかた美（み）にひと株の
蘭を根こずにこぎてゆかま志（し）

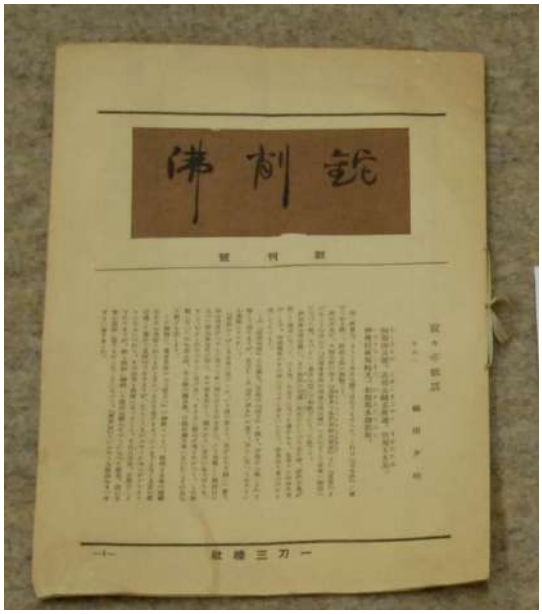
【飛騨人物事典】

紫陽花のつゆげき花を瓶にさし
なつかし人を偲ひまつらむ　夕咲

ほとほとにたはねられたる盆はなの
桔梗の花眼にすみて白し　夕咲

獄はしら雪花よめすがた
里はもみじのいろかさね　夕咲

七草の数に入らぬとひる顔の
うす紅色の花の愛しさ　夕咲



『鉈削佛』創刊号　夕咲寄稿

『椎の葉』
（夕咲が指導した道連吟社の会報）

徵発馬の
ほほをかるくたたき
飼主が
志(し)めやかに
何か言ひさとし居里(おり)
夕咲

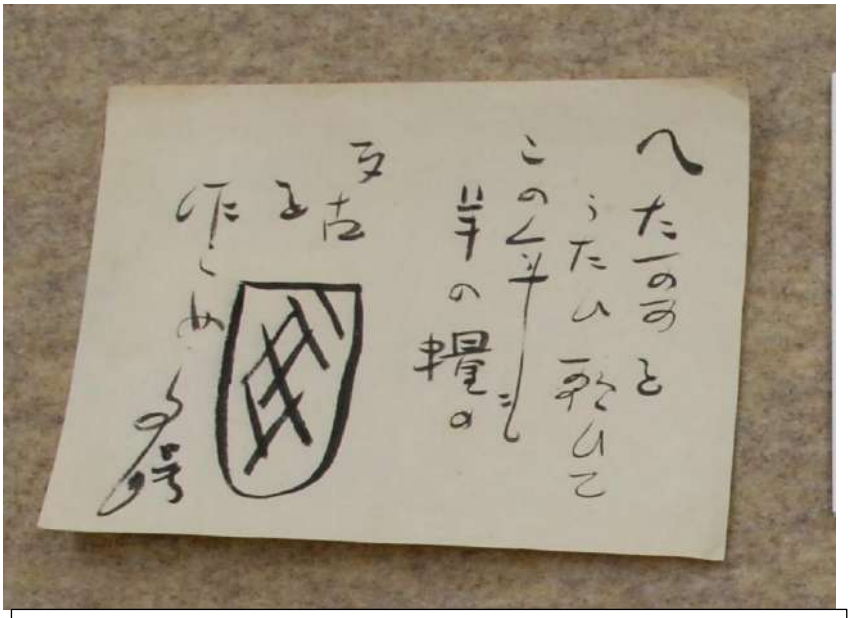
朝凪の
靄と
透志(し)て
みは可(か)山
松倉山は
ほのかなるかも
夕咲

思ふとち
柴折り焚きて
つたけせ志
上野平も
冬侘ひにけ里
夕咲

足曳の
山のかたみに
ひと株の
蘭わ根こちて
家つとにせむ
夕咲

野茨の
花こぼれいて
雨あとの
黒ほこ道の
いよに黒志も
夕咲

石の上に
こころ幽けく
いく時を
おり経しものか
梅かほる夜を
夕咲



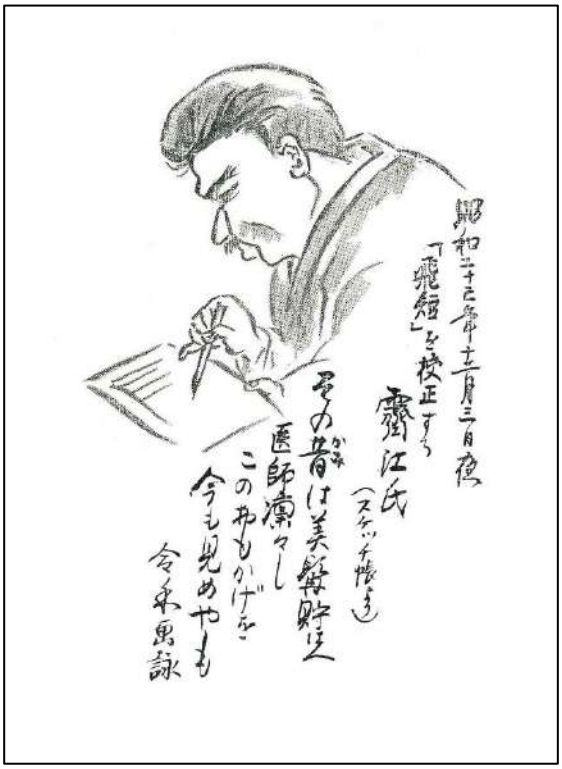
へた歌を
うたひ歌ひて
この年も
羊の糧の
反古を作らめ
夕咲

『山花一束』『山づと』
福田夕咲著

四、富田（とみた） 令禾（れいか）

明治二十六年（一八九三）四月十三日～昭和六十年五月二十九日

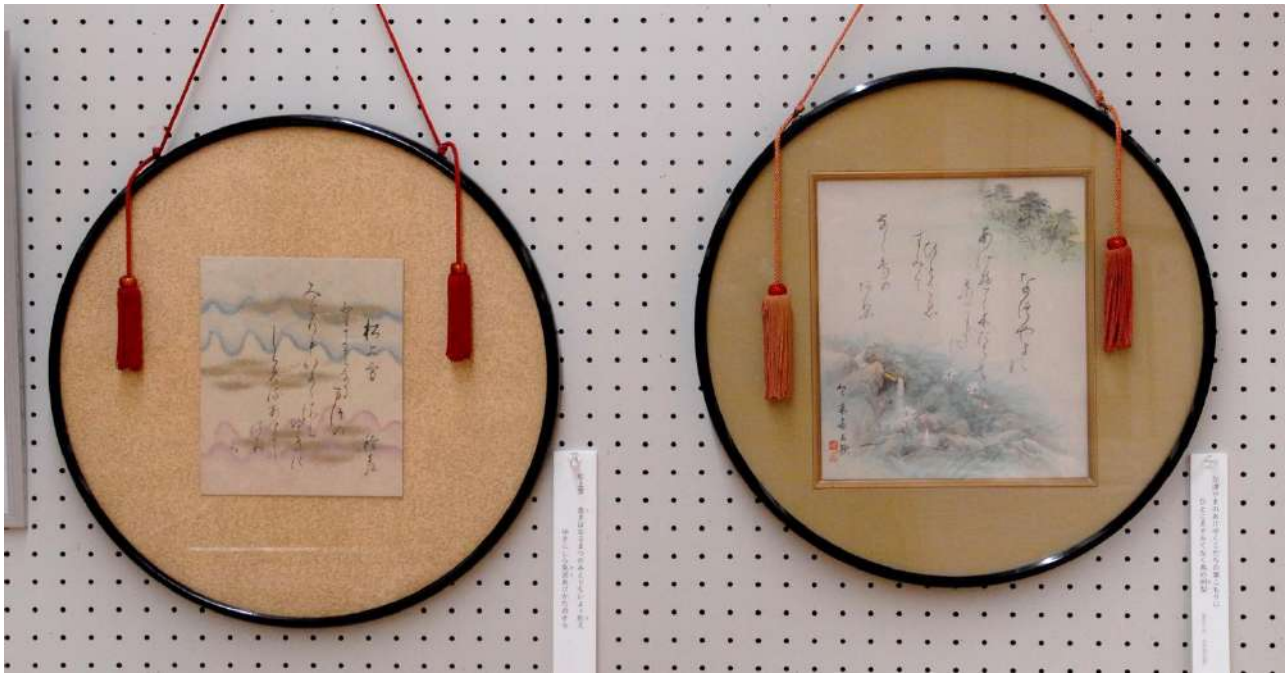
日本画家・郷土史家。高山市八軒町一の人。本名は稔彦。初号を位峰。斐太中学、京都絵画専門学校卒。菊池契月に師事。京都市展に六回入賞。昭和二十年帰郷。山岳風景画家として知られる。角竹喜登による『高山市史』や町村史の編纂に資料を提供するなど協力した。昭和二十一年飛騨短歌会に参加し、二十二年福田夕咲らと「道づれ吟社」を結成。当時の飛騨における代表的な文化人とされる。著書『飛騨の伝説』上下、『飛騨の高山』。高山市文化芸術文化顕彰（昭五一）。



昭和二十三年十二月三日夜「飛短」を校正する霽江氏

その昔は美髯貯はへ医師凛々し
このおもかげを今も見めやも　令禾画詠

【巴陵群像】

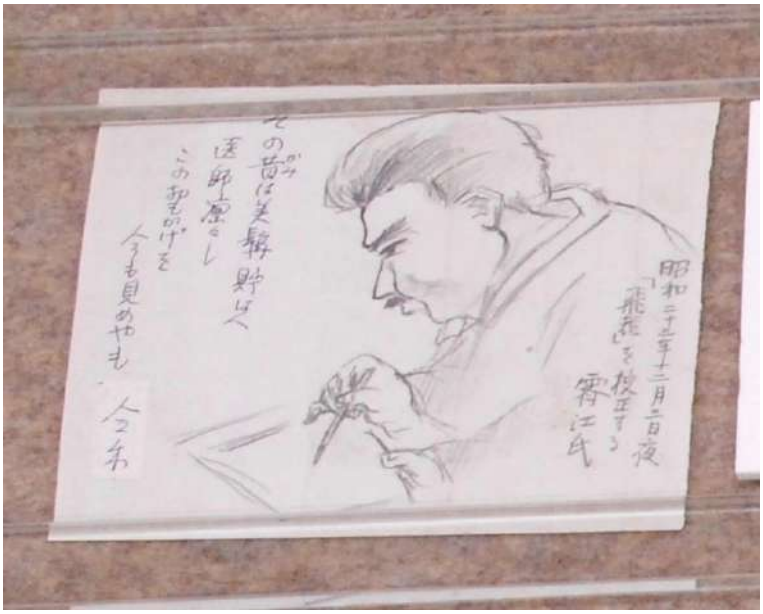


な津（つ）やまのあけゆくこだちの葉こもりに
ひとこゑすみてなく鳥の阿梨（あり）

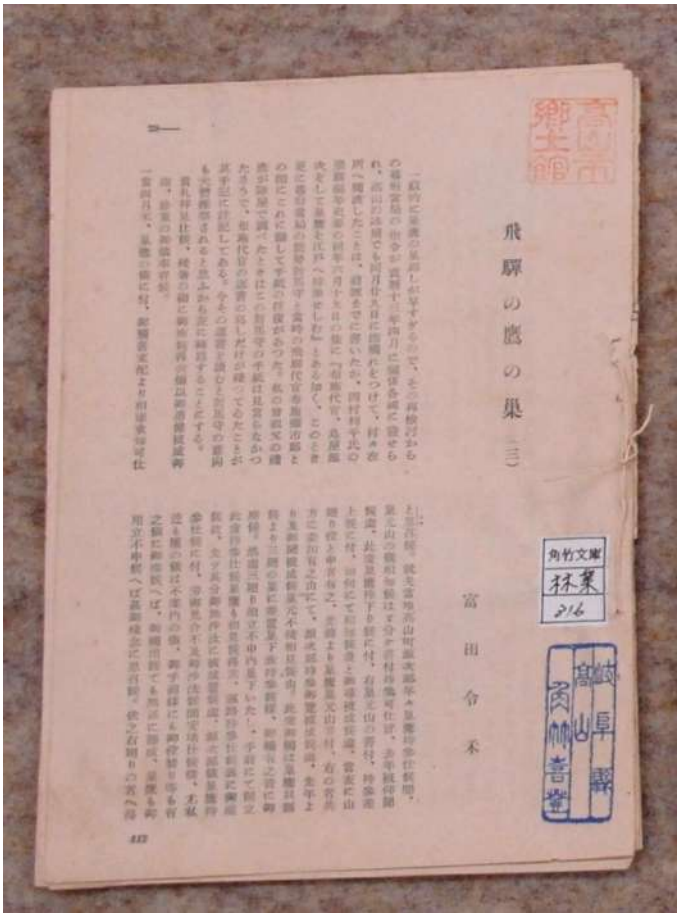
松上雪

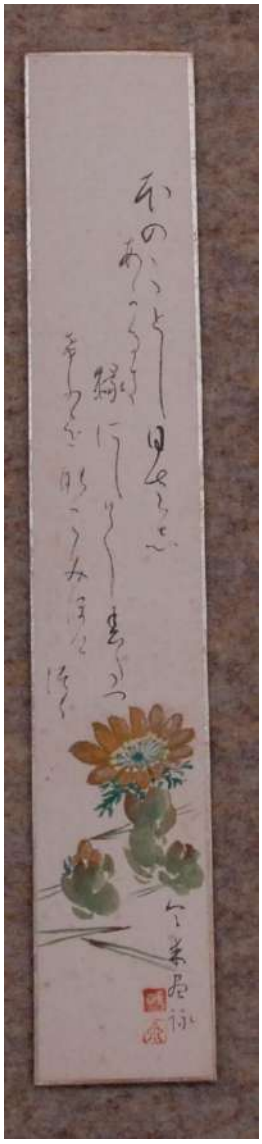
登（と）きはなるまつのみとりもいよゝ佐（さ）え
ゆきにしら免（める）流あけかたのそら

令禾画　霽江氏のスケッチ

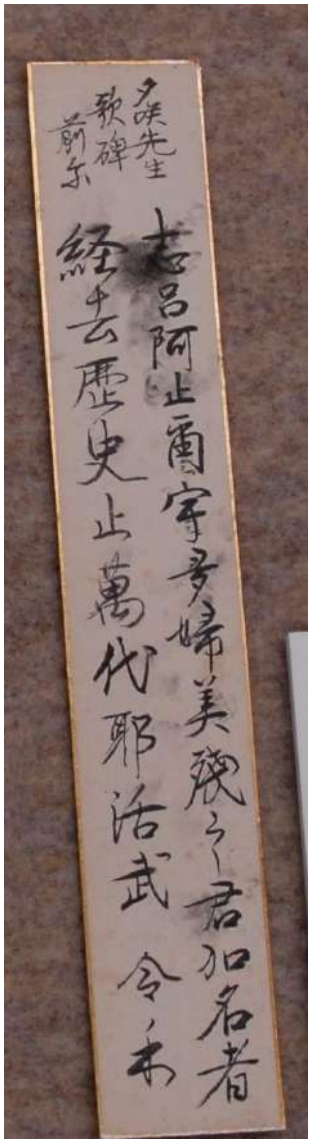


飛騨の鷹の巣　（切り抜き）





本のごとしひさしあかるき緑にして
春立つけふをなごみほけつつ　令禾



夕咲先生歌碑前に

志呂阿止爾宇多婦美残こし君加名者
経去歴史止萬代耶活武　令禾

城跡に歌碑(うたふみ)残し君が名は　経(ふ)り去(ゆ)く歴史を萬代(よろずよ)や生きむ

昭和四十一年四月二十六日　月見平にて　富田令禾

五、鎌手（かまて） 白映（はくえい）

明治二十八年（一八九五）五月一日～昭和五十三年（一九七八）二月二日

歌人。高山市下一之町の人。本名は隆三。斐太中学卒。

家業の洋品雑貨店を営んだ。大正二年（一九一三）の「飛騨短歌会」創設メンバー。五年（一九一六）白映が主宰し歌誌『裸形』を発刊。七年（一九一八）には福田夕咲、山田白馬らと「山百合詩社」を発足。昭和四年（一九二九）に『悲陀』、五年（一九三〇）には第二次『裸形』を発刊。また戦後の二十一年（一九四六）に『飛騨短歌』を出し、平成九年（一九九七）の廃刊まで続いた。野口雨情、若山牧水と交友があった。飛騨短歌史に重要な役割を果たし、中心的な指導者。絵や篆刻にも優れ古渓と号した。

歌集『夕映』『鎌手白映遺歌集』。

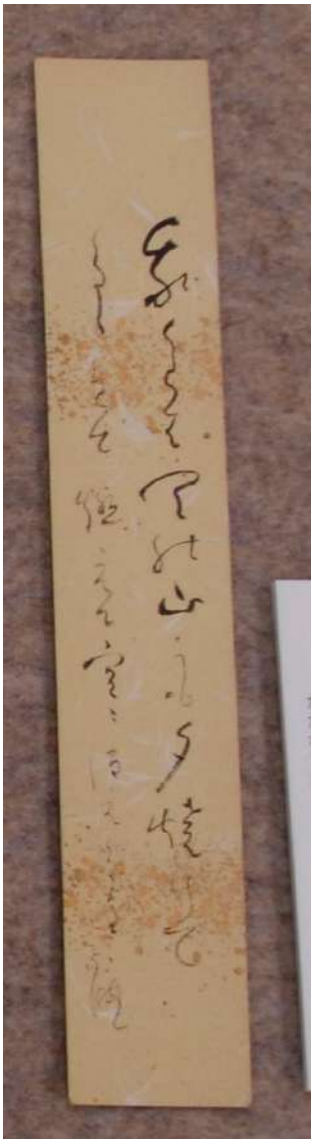
【飛騨人物事典】

のりくらは天のた可山（か）夕焼て
ただれて燃えて空に消えたり　白映

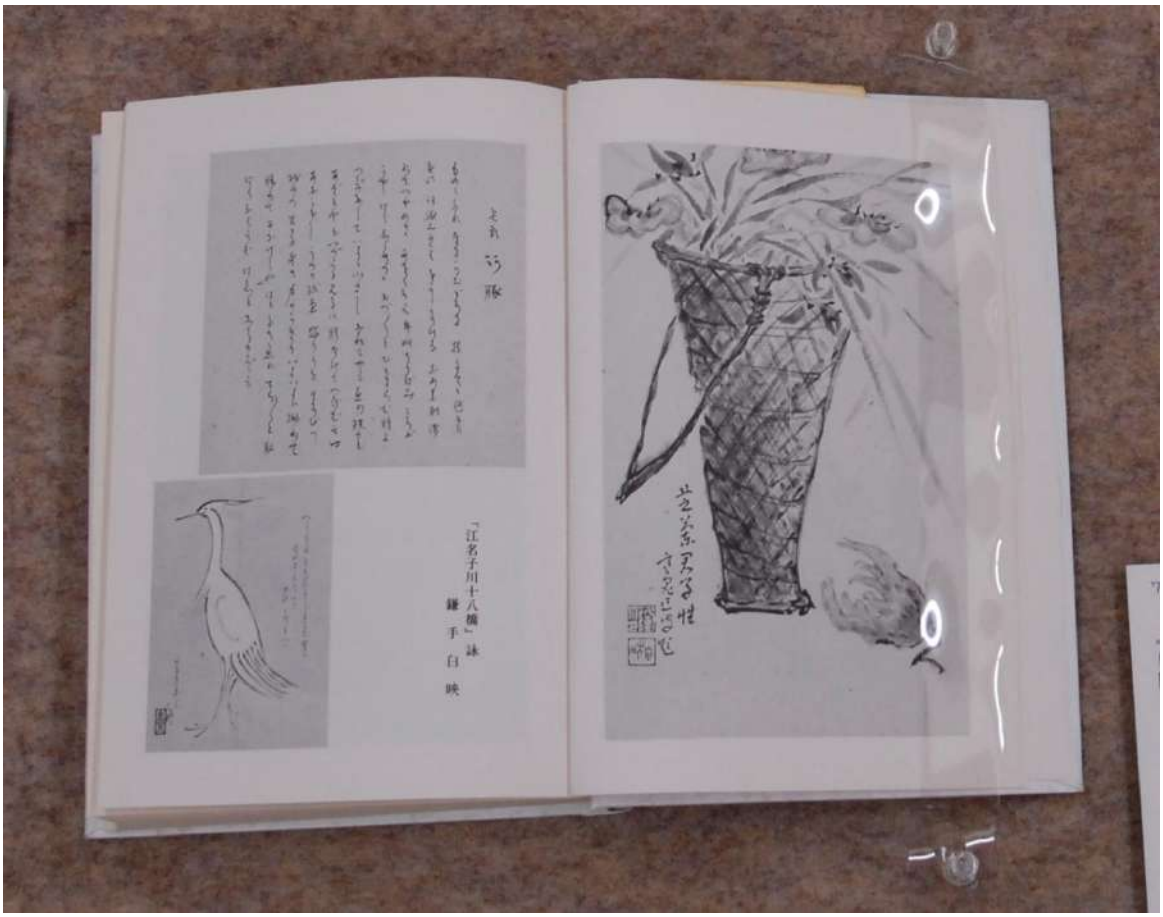
上野町、町内公民館敷地内に、乗鞍岳を見わたすかのように建っている。昭和五十三年（一九七八）二月二日、享年八十四歳で亡くなった白映の遺徳を偲び、飛騨短歌会の協賛を得て、三組の子供夫婦によって建設された。

「裸形」第5年第5号

「裸形」創刊号



のりくらは天のた可（か）山夕焼て
ただれて燃えて空に消えたり　白映



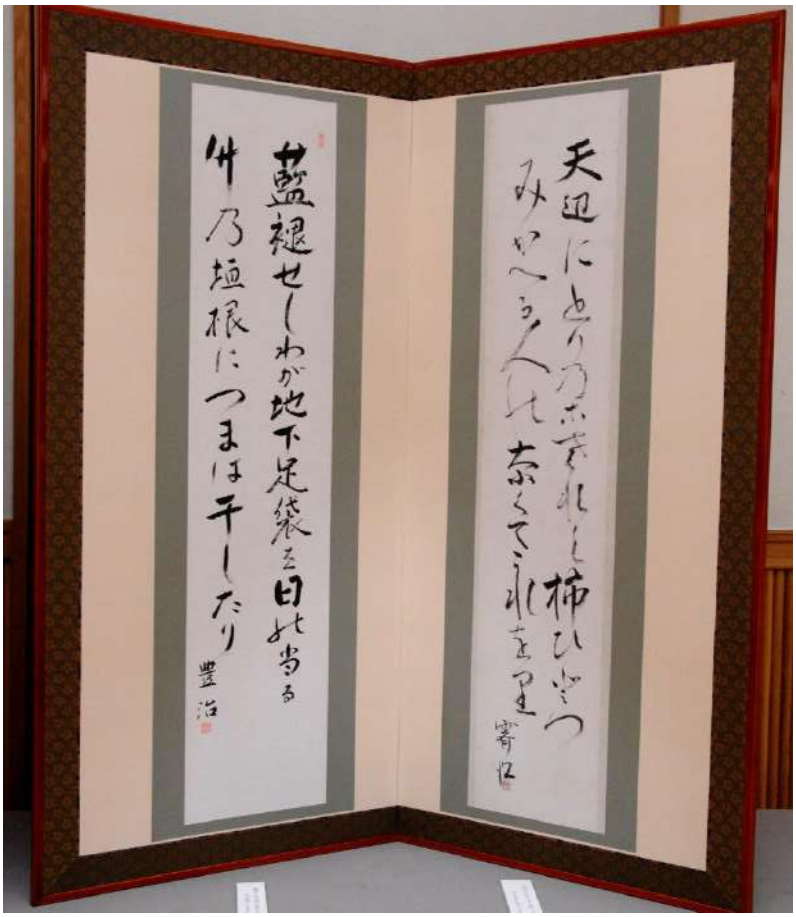
『白映遺歌集』

六、都竹（つづく） 豊治（とよじ）

大正十三年（一九二四）六月九日～没

造園業・歌人。大八青年学校、陸軍中野学校卒。昭和二十七年造園業の「撫石園」創立。二十二年飛騨短歌会へ入会し四十四年～平成八年編集同人。新アララギ同人。松之木町短歌グループ、萌木会など十以上の短歌グループを指導している。高山市文化協会副会長を務めた。歌集『村から町へ』『石の声』『続石の声』。高山市学芸表彰（平三）。岐阜県芸術文化活動等特別奨励（平九）。岐阜県歌人クラブ賞（平十一）。

【飛騨人物事典】



天辺にとりのこされし柿ひとつ
みかえる人の奈（な）くてうれをり　霽江

藍褪せしわが地下足袋を日の当る
竹の垣根につまは干したり　豊治

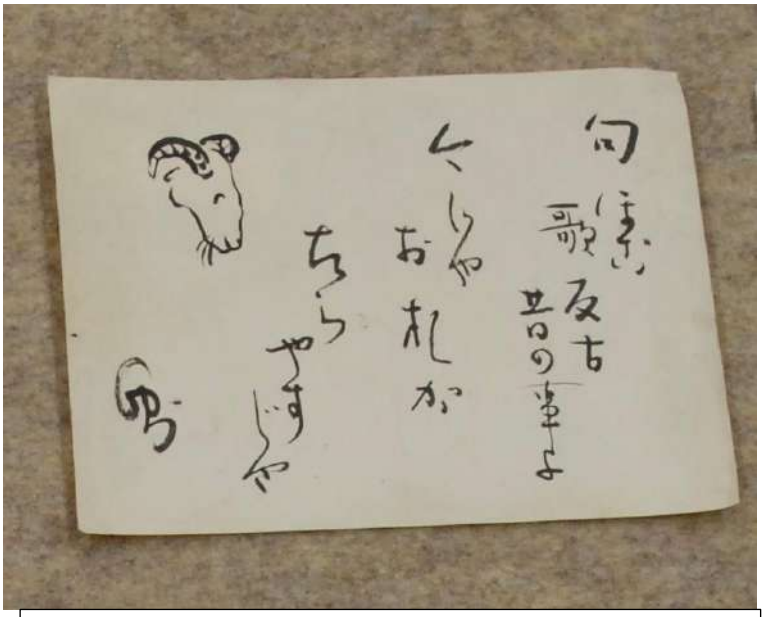
七、山田（やまだ）　白馬（はくば）

明治二十五年（一八九二）十一月十四日～昭和五十年（一九七五）十一月九日

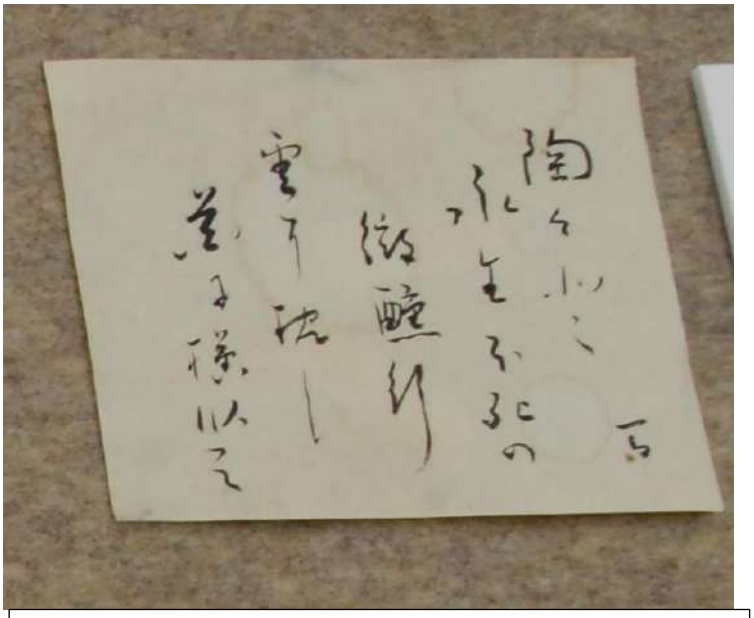
民俗学研究家。高山市天性寺町から宮村（一之宮町）へ転居。山田霊林の弟。本名は鎌太郎。失われゆく飛騨の歌謡と民俗を、大正中期から昭和初期にかけて農村各地で採録し『ひだびと』などに発表。昭和十八年（一九四三）発足の郷土芸能研究会の発起人の一人。飛騨短歌会の初期に参加。

著書『飛騨民謡物語①②』『屋台ものがたり』

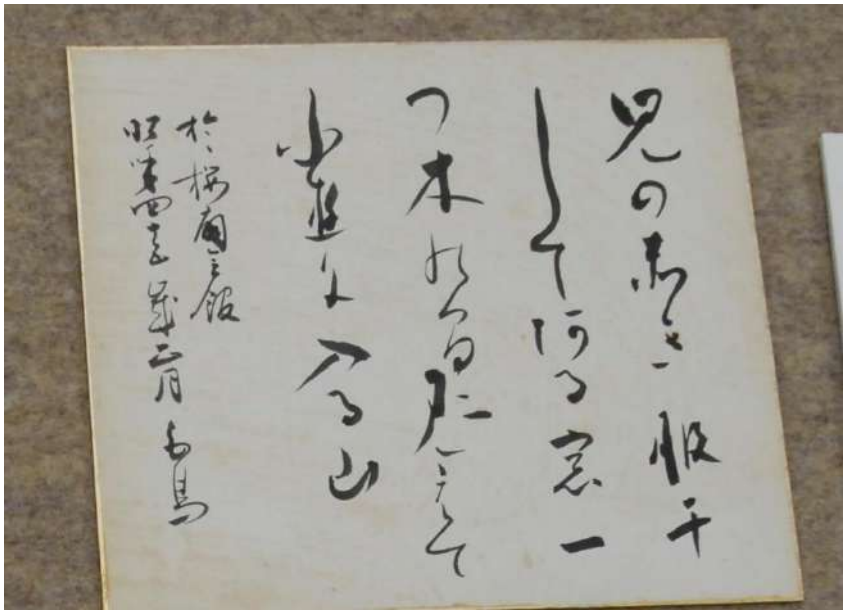
【飛騨人物事典】



句ほご
歌反古
昔の事よ
今じやお礼が
たらやすじや

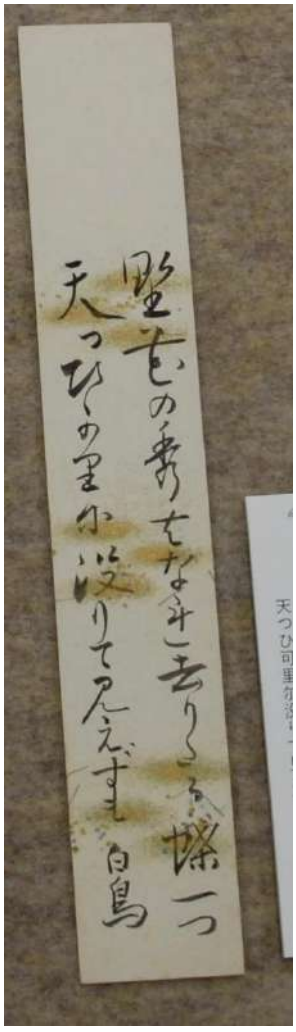


陶々と
永生不死の
微醺行
雲に枕し
花に様似て

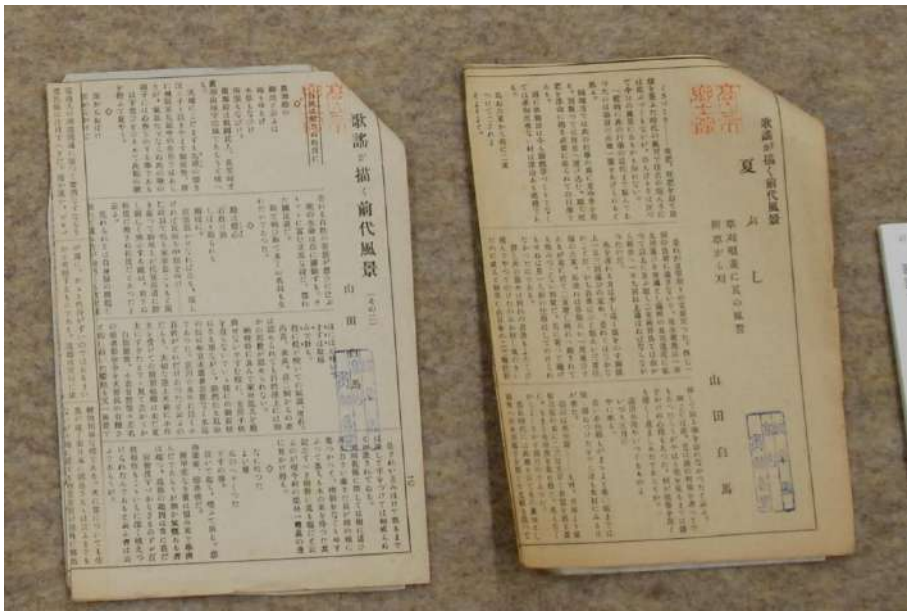


児の赤き服干
してある窓一つ
木の間に見えて
ふゆに入る山
白馬

於桜園の館
昭和四十五年正月
白馬



野花の秀者な連去り太る蝶一つ
天つひ可里尓没りて見えずも　白馬



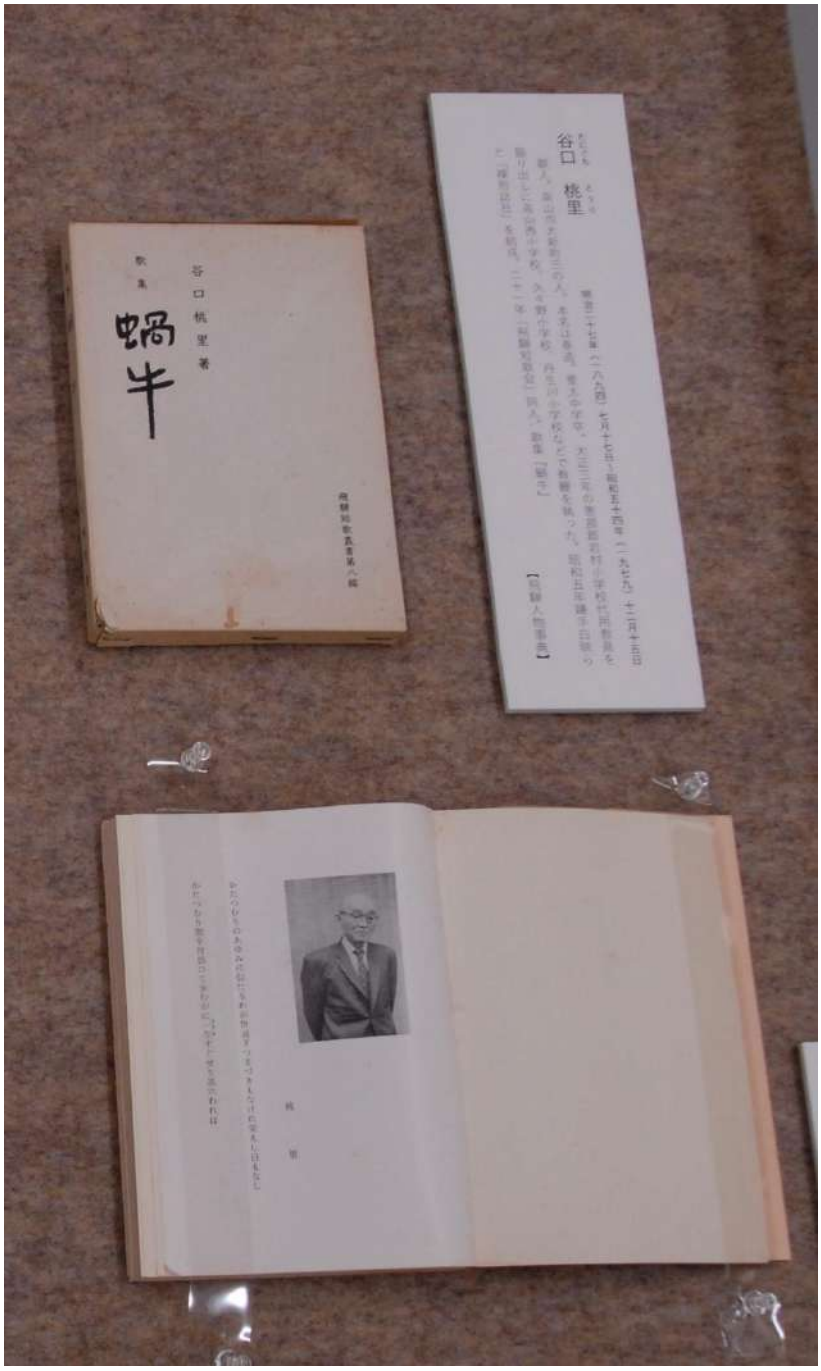
歌謡が描く前代風景（切り抜き）

八、谷口（たにぐち） 桃里（とうり）

明治二十七年（一八九四）七月十七日～昭和五十四年（一九七九）十二月十五日

歌人。高山市大新町三の人。本名は泰造。斐太中学卒。大正三年の恵那郡岩村小学校代用教員を振り出しに高山西小学校、久々野小学校、丹生川小学校などで教鞭を執った。昭和五年鎌手白映らと「裸形誌社」を結成。二十一年「飛騨短歌会」同人。歌集『蝸牛』

【飛騨人物事典】



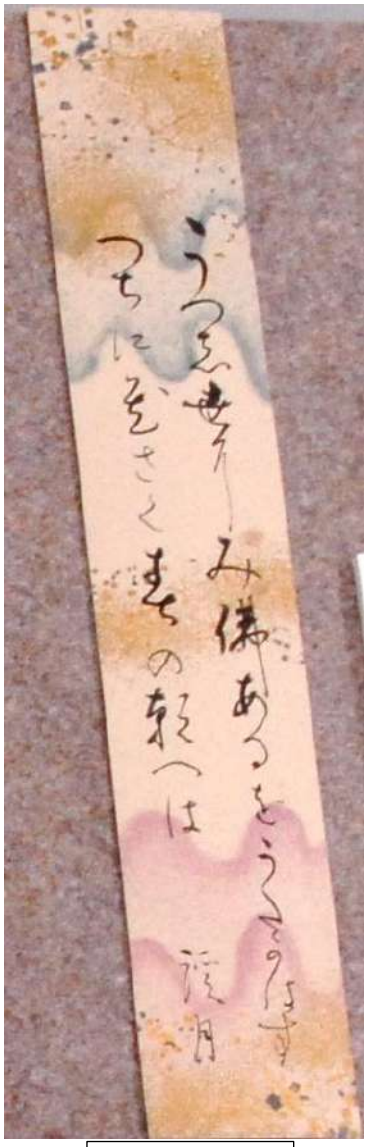
歌集『蝸牛』　飛騨短歌叢書第８編

九、森（もり） 渓月（けいげつ）（荒川（あらかわ） 喜一（きいち））

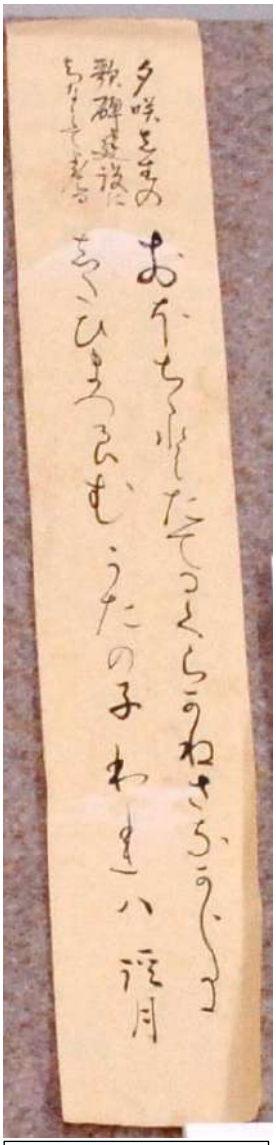
明治三十五年（一九〇二）十二月三日～平成六年一月二十三日

学校長・歌人・郷土史家。丹生川村大谷出身で高山市大新町三に居住。旧姓は森。号を渓月。斐太実業教員養成所卒。青年学校長を経て昭和二十二年大八中学校教頭、二十八年丹生川村白井小中学校長。三十二年丹生川村細越分校長。『大八賀村史』『清見村史』『高山市史』編纂に携わる一方、歌人としても活躍し五十七年～平成六年飛騨短歌会長。歌集『流木』。高山市文化協会顕彰（昭和五七）。高山市長表彰（昭六一）

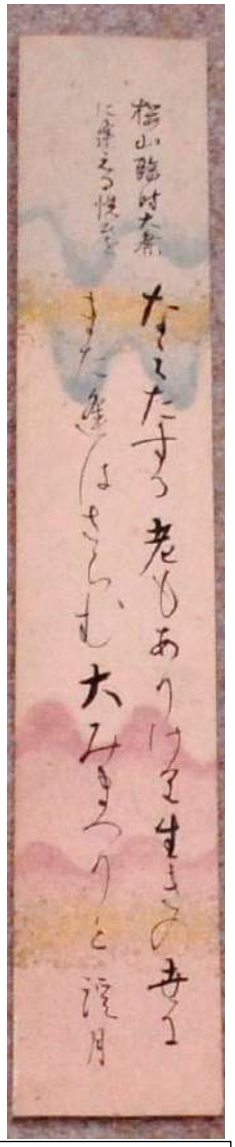
【飛騨人物事典】



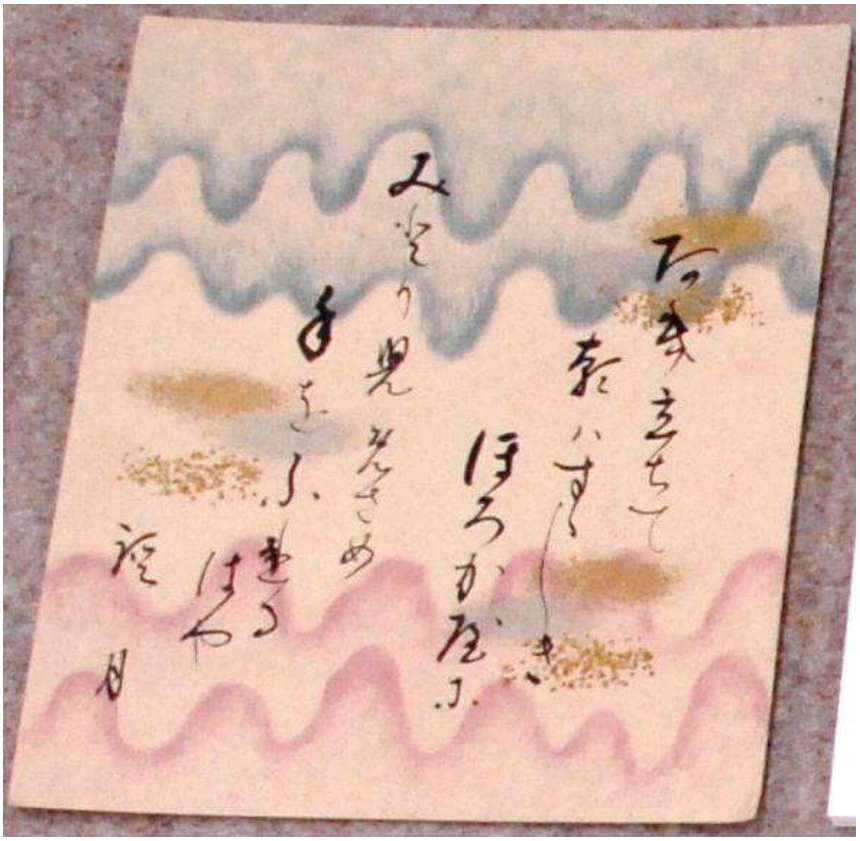
うつ志世（し）耳み佛あるをう多（た）可はす
つちに花さく春の朝へは　渓月



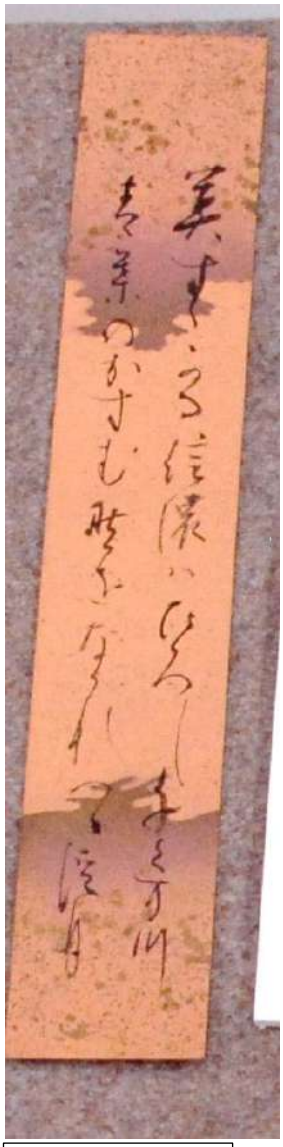
夕咲先生の歌碑建設にちなみてよめる
お本ち々登（と）たてるくら可（か）ねさ奈（な）可（か）らに
志太ひまつ良むうたの子わ連ハ　渓月



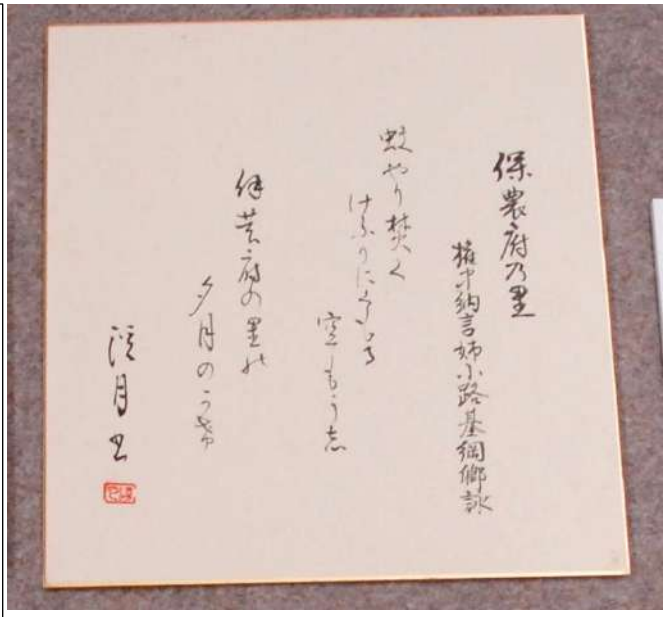
桜山臨時大祭に逢える悦びを
なミたする老もありけ里（り）生きの世に
また逢はさらむ大みまつりと　渓月



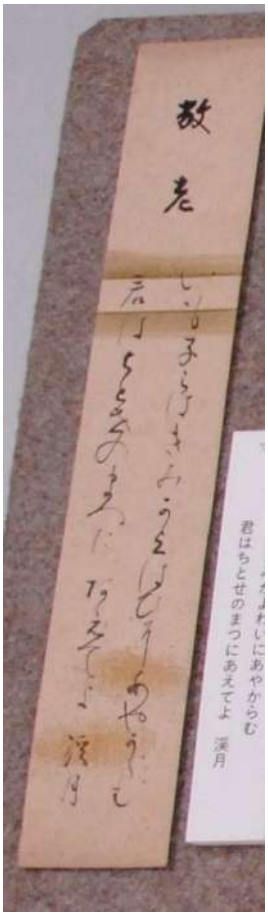
阿幾(あき)たちて朝ハすゝしきほろか屋に
みとり児さめ手をふれるはや　渓月

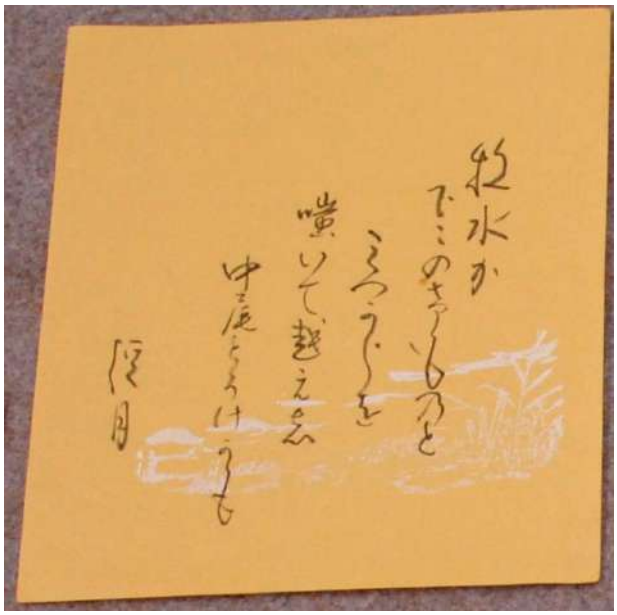


美すゝ可(か)る信濃ハひろし千(ち)く万(ま)川
青葉のかすむ野をな可(か)れる　渓月



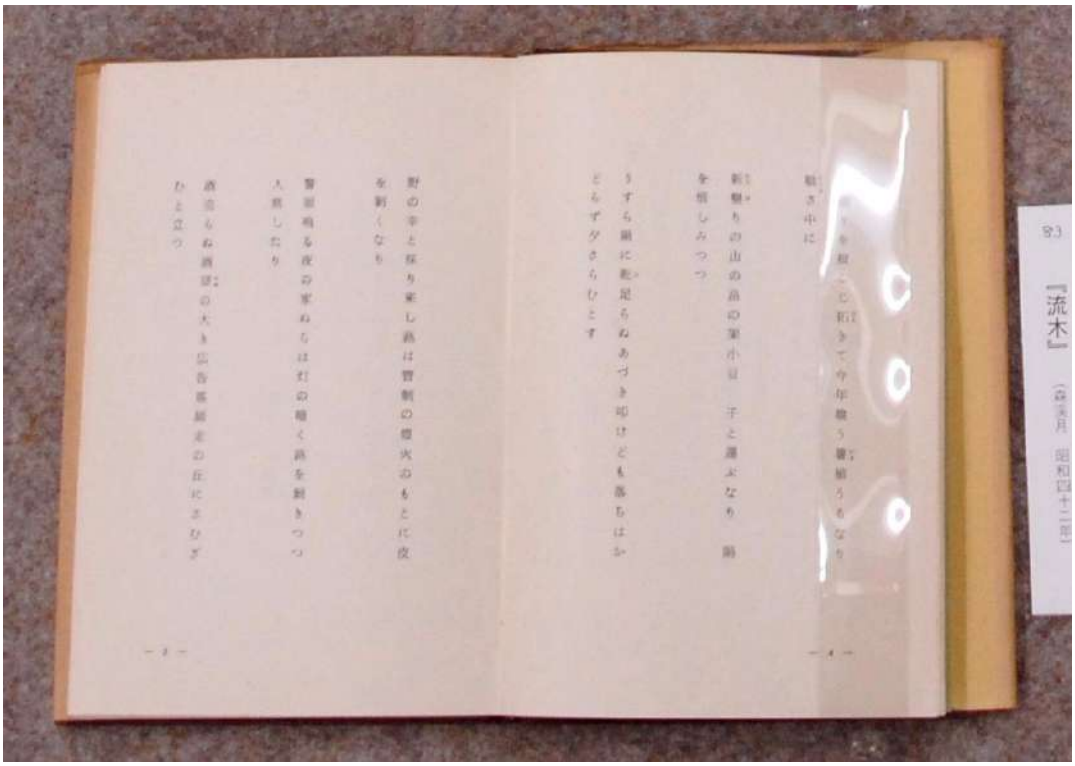
保農府の里　権中納言姉小路基綱卿詠
蚊やり焚くけふりにくもる空もうし
保農府の里の夕月の可希　渓月書





牧水か下々のけもものとみつからを
嗤いて越えし中尾とうけかも　渓月

いもこらはきみがよわいにあやからむ
君はちとせのまつにあえてよ　渓月

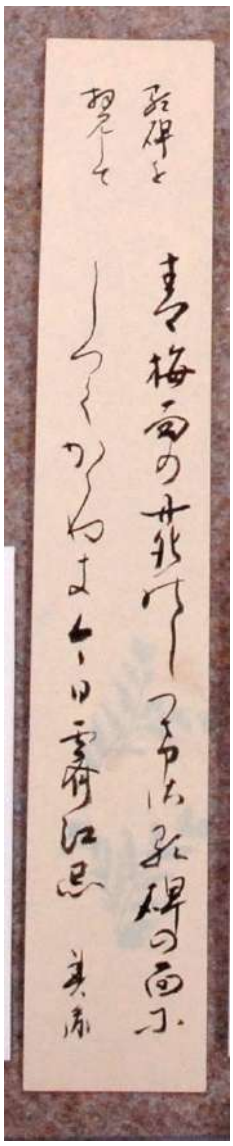


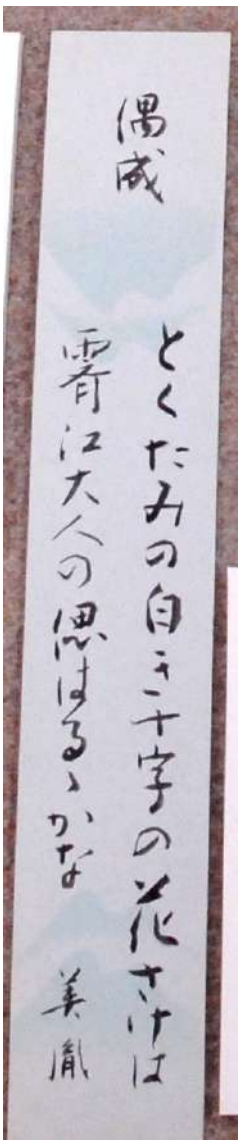
『流木』（森渓月　昭和四十二年）

十、江黒（えぐろ） 美胤（よしたね）

明治三十八年（一九〇五）六月二十六日～平成十二年五月

学校長・歌人。斐太中学、岐阜師範学校二部卒。大正十三年に小学校訓導となり、昭和二十四年から高山北小、同第四中、同山王小の各校長。短歌を松田常憲に師事し裸形、飛騨短歌会の中心的指導者とされる。三十七年に教職退職後は、飛騨短歌会の会誌『飛騨短歌』編集を平成八年十二月の廃刊まで担当。歌集『晨の星』。勲五等瑞宝章（平五）。





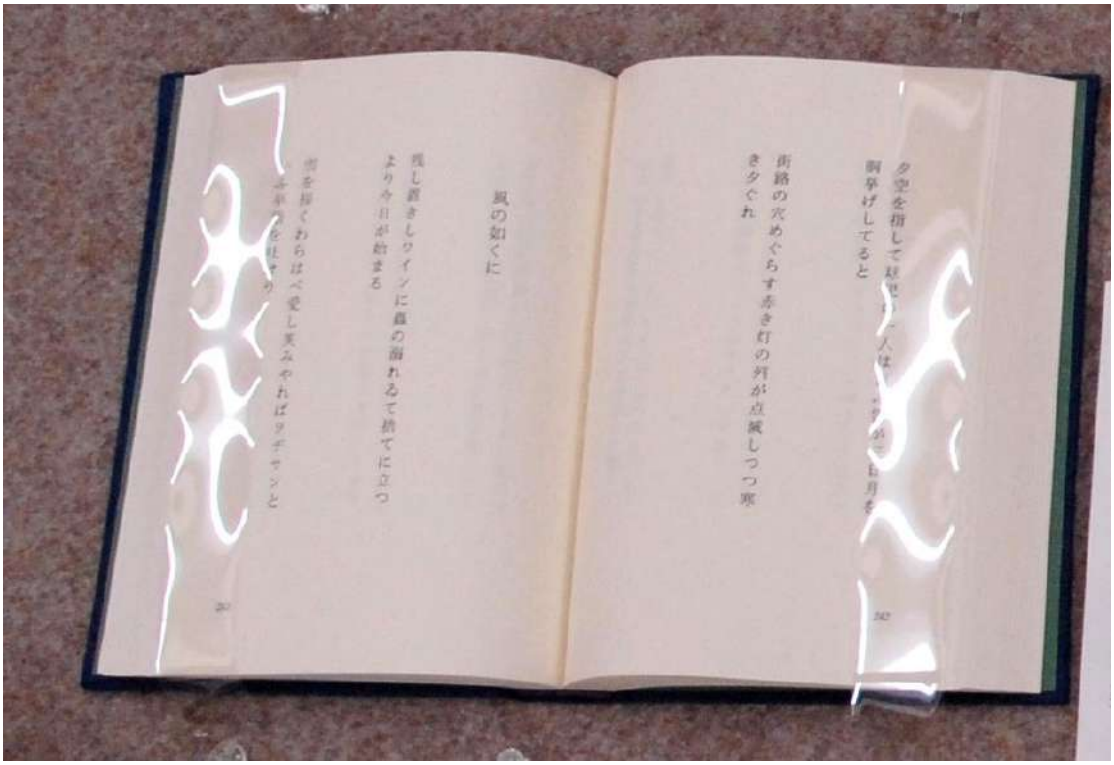
【飛騨人物事典】

歌碑を拝見して

青梅雨の花のしつ希佐（けさ）歌碑の面に
しつくがき今日霽江忌　美胤

偶成

とくたみの白き十字の花さけは
霽江大人の偲はるゝかな　美胤



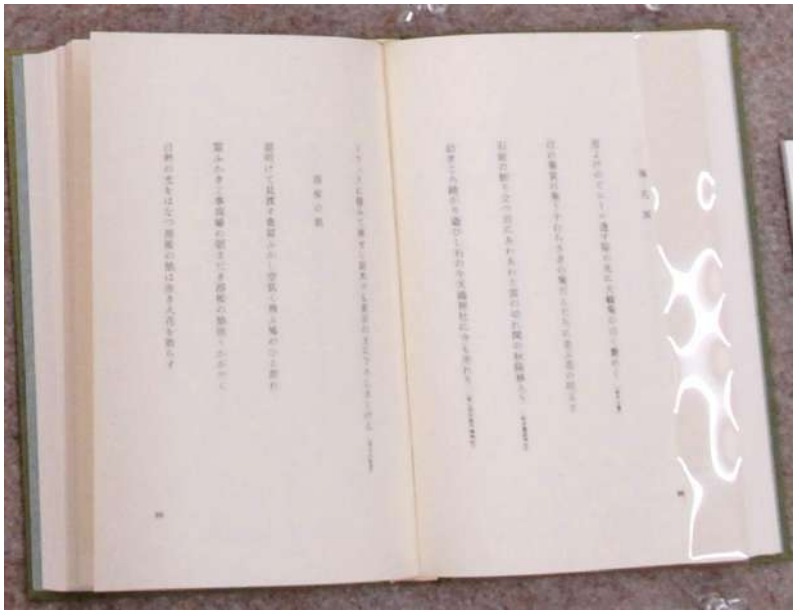
歌集『沙羅の樹』
（江黒美胤　平成十二年）

十一、浅本（あさもと）　義一郎（ぎいちろう）

明治四十四年（一九一一）十一月二十三日～没

教師・歌人。高山市生まれ。西尋常高等小学校卒。飛騨各地の小学校で教諭を務め昭和四十五年退職。少年時代から短歌に親しみ、昭和三十六年の下呂短歌会（現河畔短歌会）創立メンバーで、五十一年から代表。五十年全国結社の武都紀歌会に入り選者も。日本歌人クラブなど所属。歌集『岩崩え道』『液果集』ほか。岐阜県芸術文化活動特別奨励賞（昭五七）。下呂町自治功労者（昭五七）。

【飛騨人物事典】



『液果集』
（浅本義一郎　昭和五十五年）

十二、飛騨短歌

昭和二十一年に「飛騨短歌会会報」として始まり、後に「飛騨短歌」と改名。平成九年の三〇〇号まで続いた。

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成三十一年三月発行

編　集　一般社団法人　高山市文化協会

印　刷　飛　騨　印　刷　株　式　会　社

高山市西之一色町三―六四七―二八

電話　（〇五七七）三二―一一九一（代）